

関山

かんざん

第30号



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア			
関山の暁鐘 無明の眠りを覺す		奥山 元照	5
— 眞の平和実現のために —			
鯨音無邊		貫首 奥山 元照 書	9
清衡さんの実践、「此の世も浄土に」		相原 康二	10
清衡さんのタネまき		山内 明美	16
円光仏に想う		伊藤 猛	19
「金色堂建立九〇〇年」を 振りかえって		菅原 光聰	26
第六十三回平泉芭蕉祭全国俳句大会 特別講演			
「有馬朗人―歳寒松柏の人生」より		対馬 康子	30
川西大念仏剣舞		佐々木邦世	40
平泉へ里帰り——			
伊豆山神社の金銀字經		八重樫忠郎	42
平泉觀光の新時代 — インバンドがもたらす文化交流の深化		山平 功二	46
中尊寺坂下ガイドさんインタビュー		破石 晋照	49
赤澤鏡剣舞 平泉中尊寺との繋がり		平山 徹	55
縁を生きる		菅野 宏紹	60
どうぞ、中尊寺通りへ		遠藤セツ子	62
園児との謡教室 花咲かば——		鈴木 四郎	66
関山句囊・歌籠			
讚衡蔵特別展示			
文化財調査中間報告		菅野 澄円	76
関山植物誌（15）		破石 晋照	82
「福聚教会・中尊寺支部便り 新刊紹介			
寒行と「無財の七施」		菅野 靖純	87
僧侶としての日々		佐々木祐輔	89
御神事能番組			
陸奥教区宗務所報			
御奉納者 御芳名			
浄財御奉納者 御芳名			
不動尊篤信御奉納者 御芳名			
執務日誌抄			
（表紙）衣川 川西大念佛剣舞			



里帰り 展示された紺紙金銀字交書経



小春日の平泉 白い大文字



金色堂建立900年シンポジウム



衣川 川西大念仏剣舞 奉演



電線地中化で景の広がった中尊寺通り



安らぎの灯り点る道

関山の暁鐘 無明の眠りを覺す

— 真の平和実現のために —

中尊寺 貫首 奥山元照

二〇二二年二月二十四日のロシアによるウクライナへの軍事侵攻、二〇二三年十月七日ハマスのイスラエルへの攻撃によるイスラエルのガザへの攻撃により、両国の尊い命が失われ、また多くの人々が傷つけられています。即時終結を強く祈る毎日であります。

二〇二四年、能登半島地震及び豪雨災害、国内外の自然災害の物故者並びに被災された多くの方々に深甚なる哀悼の意とお見舞いを申し上げ、被災各地域の復興を心よりお祈り申し上げます。

中東ガザ地区の貧困地域、ジャバリア難民キャンプ出身の医師で、パレスチナ人としてイスラエルの病院で働く初の医師となったイゼルディン・アブラエーシュ博士は、産婦人科医師として、イスラエル人とパレスチナ人両方の母親の診療と子供の誕生に携わってきました。

「ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒の生まれたばかりの子供は皆同じ。みんな同じく生まれたての赤ちゃんだ。」との実体験から、パレスチナとイスラエルは共存が可能であることを自らの医療で示してきたのです。

パレスチナ・ガザ地区の自宅からイスラエルの病院への通勤では、毎日のように国境検問所での執拗な検閲を通り、イスラエルの人々の為に働きました。病院の中では命が平等なように、外の世界でも同じく人々は平等であるべきだと、両国の分断に医療で橋を架けようとしてきたのです。

しかし二〇〇九年一月、イスラエルの人々の為に懸命に働いていたアブラエーシュ博士のガザの自宅が、イスラエル軍の戦車の砲撃を受け、三人の娘と姪が殺害されてしまうという悲劇がおこりました。

彼は正義を求めてイスラエル政府を訴え、娘の死の責任を追求しましたが、その行為は決して一方的に復讐心や憎しみを持たない、彼の赦しと和解からのものでした。二〇一三年に出版された彼の著書「それでも、私は憎まない」の中でこのように述べています。

「娘たちと姪を死に至らしめた今回の悲劇により、わたしの信念はますます深まり、分断に橋を架けようとする決意は固まった。暴力は不毛でかつ時間と命と資源の無駄使いであることを、わたしは骨の髄まで身に沁みて知っているし、暴力がさらなる暴力を生むことは証明されている。暴力では解決できないどころか、悪循環に陥るだけだ。分断に橋を架け、両国民が共存し、ともに目標を達成するための道は一つしかない。私たちがゴールに導いてくれる光を見つけなくてはならない。ここで言っているのは宗教的信仰の光ではなく、真実の象徴としての光だ。霧を晴らして、わたしたちに物事をはっきり見させ、叡智を発見させる光である。真実の光を発見するには、話し合い、相手の言葉に耳を傾け、尊敬し合わなくてはならない。憎むことにエネルギーを浪費する代わりに、目を見開き、実際に何が起きているかを発見することにエネルギーを使うべきだ。わたしたちが真実を見ることが出来たら、共存は可能だ。」

お互いの考えにすべて同意はできなくても、お互いを尊重することにより、対話を通して少しずつでも憎しみを昇華させていくことはできるものだと信じます。

平安時代の終わり、みちのくの地で、その憎しみを天台仏教により昇華し、浄仏国土建立を發願したのが奥州藤原清衡公でありました。

その後、建武四年（一二三三）の火災により中尊寺塔堂悉く焼失した後、今残る旧梵鐘は、康永二年（一二三三）に願主金色院頼栄により铸造されたものであります。そしてその梵鐘銘一節には、以下のように铸されています。

「関山の暁鐘 無明の眠を覚ます 鷲嶺の晚嵐 煩惱の塵を払い
魑魅を摧伏して 咸霊 仙を降るがごとく 悉く六道を極め 九泉に下達せん
剣輪は苦を輟め 鯨音は無辺なり 普く聖賢を配して 父母を四化す
利物の心堅くして 铸するに金錢を施す 銘に鏤字を加えて 永く不朽に伝えん」

関山の鐘の音には、人々を無明の眠りから目覚めさせ、鯨の声が何百キロも果てしなく伝わるように、長い間戦いによって失われた全ての尊い命を慰め、いつまでも響き渡ることを祈る金色院頼栄の願いが込められているのです。

その後、イゼルデイン・アブラエーシュ博士は、残された家族を守るために現在カナダでの生活を選択しました。しかし、パレスチナとイスラエルの平和的解決を決してあきらめていません。

「世界の人々の間にある、無知という障壁を叩き壊して、より明るい未来を実現する為に、私たち全員が一隻

のボートに乗って、お互いを責めるのはやめて、共生していくという価値観を持たなければならない。そして、具体的に行動すれば多くの境界を越えていくことが出来る。」

この言葉に込められている博士のメッセージは、とても克服できないと思える絶望的な状況にあっても、お互いの理解の為に行われた小さな行動にも、尊くかつ強靱な問題解決の力の存在があるということであると思いません。

私たちひとりひとりが、この問題を自分のこととして捉え、足元レベルでの平和のための具体的な行動を起していくことが大きな力となることに思いを致すのであります。



貫首 揮毫

清衡さんの実践、 「此の世も浄土に」

相原 康 二

◆はじめに

十二世紀の北日本に平和を実現したのが奥州藤原氏でした。中でも初代の清衡さんは平和・浄土を渴望しただけでなく、その実現のために卓越した政治力を発揮し、総合的な政策を展開しました。「首都」ともいふべき平泉は、宗教・政治・経済の中心地であり「浄土都市」でありました。

一九八八年から開始された「平泉遺跡群」の発掘調査は、彼の諸政策の具体相を明らかにし、従来の文献史研究と相まって、平泉文化研究を急速に深化させ、発展させました。以下、その概要を紹介します。

◆仏教の保護・振興策

清衡、基衡、秀衡さん達は、それぞれ中尊寺、毛越寺、無量光院を建立したのはあまりに有名です。

* 「中尊寺建立供養願文」——清衡さんの浄土渴望に関連する最も重要な文書です。天治三年（一二二六）三月二十四日、中尊寺落慶供養にあたり清衡さんが捧げた願文。彼七十一歳、その死の二年前です。その鐘樓の部分に彼の願いが集約されています。

* 『吾妻鏡』 文治五年（一一八九）九月二十三日条（原文「清衡は」 両国陸奥・出羽に一万余りの村有り。村毎に伽藍を建て、仏性燈油田を寄附す」

* 『同』 同年九月十七条の所謂「寺塔已下注文」、「凡そ清衡在世三十三年の間、吾が朝延暦、園城、東大、興福寺の寺より、震旦の天台山に至るまで、寺毎に千僧を供養す」

* 「紺紙金銀字交書一切経」 写経

後に中尊寺経蔵別当になる自在坊蓮光を奉行として一一一七～二五年までの八年間を要して写経。当初の五三〇〇巻は経堂に納められていましたが、戦国時代

末に搬出され、現在はその大半が高野山金剛峰寺に移されています。

その一卷である「大般若経卷三十一」の奥書には、「元永二年（一一一九）、奥州江刺郡益澤院、執筆修行僧堯暹 大檀主藤原清衡北方平氏」とあり、写経は清衡夫妻の発願であつたのでした。金色堂の建立も同様です。

◆奥大道の整備

『吾妻鏡』前掲「寺塔已下注文の関山中尊寺の部分、（上略）先ず白河関より、外浜に至る路一町ごとに笠卒塔婆を立て、その面に金色の阿弥陀像を函絵す」とあります。奥州藤原氏も道路（街道）を仏教の力も借りて維持・管路していたのでした。恐らく五〇〇〇本近く建てられたであろう笠卒塔婆の実物がそのうち発見されることでしょう。

◆平泉遺跡群の発掘調査の成果

既述のように一九八八年以降激増した平泉遺跡群の発掘調査は、政治、経済、日常生活に関わる資料を大

量に出土し、清衡さんの政策を復元する手掛かりになっています。

◆陶磁器の分布が示唆すること

奥州藤原氏は陶磁器をこの上なく好んだので、当時の遺跡から必ず出土し、良好な研究資料になっています。

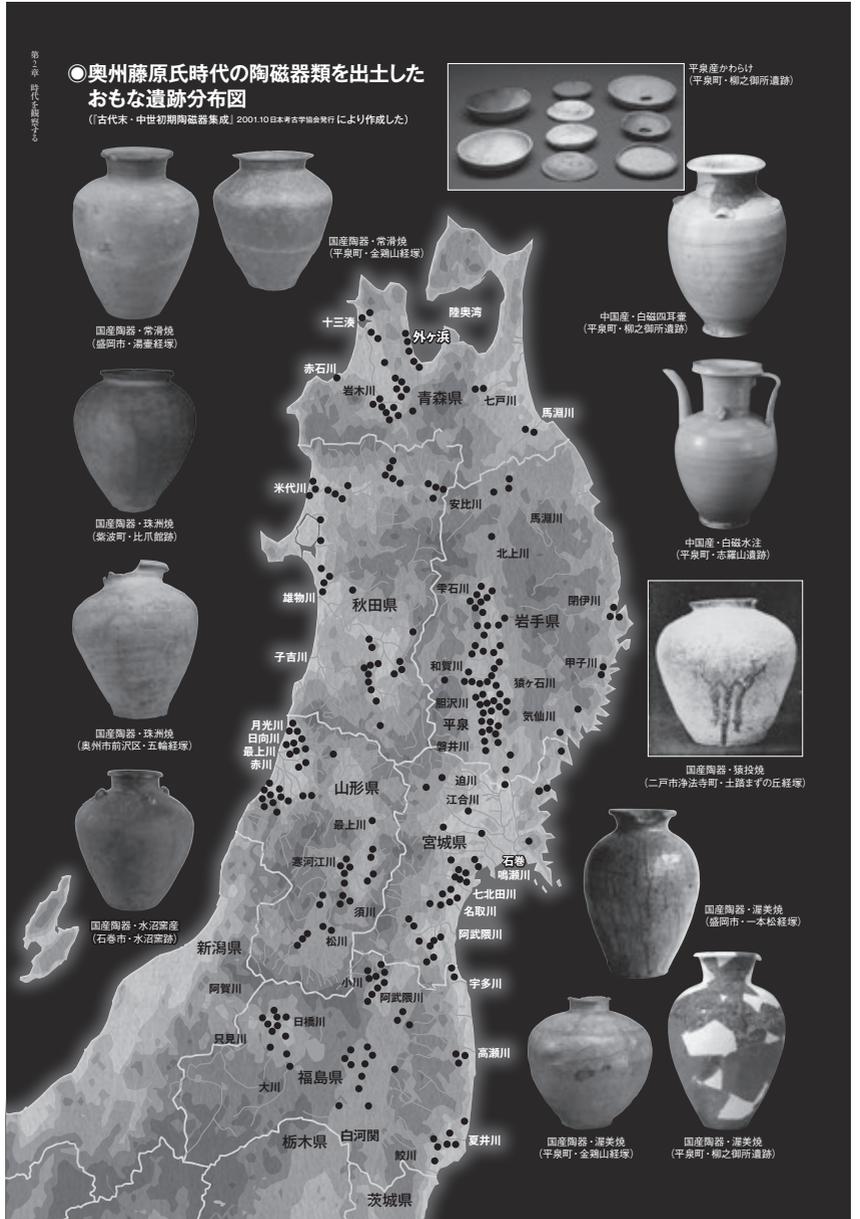
まず、中国から輸入した陶磁器類（白磁・青磁・青白磁などの磁器と、緑釉・褐釉などの陶器）があります。中国から博多へ運ばれ、国内各地へ運ばれました。もしかすると、平泉と中国との直接貿易もあつたのでは。

陶器は、三河国（愛知県）産の猿投焼・常滑焼・渥美焼と、能登国産の珠洲焼があります。数量的には常滑焼と渥美焼で八十パーセントを超えています。

これらを出す遺跡の分布状況が重要な可能性を提示しています。

▼奥州藤原氏の勢力範囲

北海道南から東北地方全域に及ぶその分布状況は、奥州藤原氏の勢力範囲を反映しています。



相原康二「奥州藤原氏のセラミックス・ロード」『平泉』2009 川嶋印刷発行所収

▼奥大道は実在

福島県に発し、宮城・岩手・秋田を経由して津軽平野に至る遺跡群の連なりは、『吾妻鏡』にその記述がある「奥大道」を示します。また、それには八戸方面に向かう支道もあったとも思われます。

▼河川交通

各地域を流れる大河沿いにも遺跡群が連なるので、大河も交通手段であって、川沿いの遺跡群の中には「河港」も含まれているのでは。柳之御所遺跡のように。

▼河口には海港

各地域の大河が海に注ぐ河口に遺跡群が集中しています。このことは、大河の河口に海港が存在したと、即ち、現在の十三湖・能代・秋田・酒田・塩釜などの港湾機能は十二世紀、即ち奥州藤原氏時代を端緒とするという展望が開かれました。

◆統治組織の整備

此の世も浄土にするためには政治の安定も必要

です。奥州藤原氏は『吾妻鏡』に見える政庁「平泉館（柳之御所遺跡）」を中心に統治組織を整えました。

▼地域の拠点「館」

北海道南から東北地方全域に分布する数百カ所の遺跡には、平泉と同じ内容の陶磁器を出す三十カ所前後の少数の遺跡と、その一部しか出さない圧倒的多数の遺跡の二種類が存在します。前者に地域支配の拠点の「館」を想定しています。平泉出土と全く同じといってよい白磁四耳壺などを出した福島県会津坂下町の陣が峰城跡などもその一例です。

▼社会の基礎は「村」

柳之御所遺跡の井戸跡の一つ、十二世紀末の堆積土層から、「磐前村印」の文字を鋳造した銅製の印章が出土しています。磐前村は衣川あるいは前沢など平泉近くの村と推定。奥州藤原氏は各村々の神官で村長格の首人たちに、このような村印を下賜して統治させていた様子が見えてきます。

◆奥羽に産業を導入・育成

経済の発展・繁栄も浄土化には必要ですので、清衡さんは様々な策を用意しました。

▼水田開発

東北各地に残る「雲南神うんなん」は奥州藤原氏が行った水田開発の際に勧請された水神と考えられています。

▼金属加工

釜石市鶴住居の川原遺跡は奥州藤原時代の鉄製の刀や鎌やじりを製作した工房跡でした。また山田町などに同時代の製鉄炉跡が確認されています。

銅器の生産の痕跡は平泉の毛越遺跡、前沢の白鳥館跡などに確認されています。

銅器では他に、小型の鏡の鑄型が平泉町内から出土しています。大型の銅器では、巨大な梵鐘ぼんしょう（鐘）を鑄造した遺構が平泉町白山遺跡に確認されています。

▼陶器づくり

清衡さんは奥羽の地に陶器「産業」も興そうと

した可能性があります。北上川河口の石巻市水沼窯跡と平泉町花立窯跡で渥美焼そっくりの陶器が焼かれていたこと、米代川沿いの能代市エヒバチ長根窯跡で珠洲焼そっくりの陶器が焼かれ、操業期間はいずれも十二世紀でした。このことは、清衡さんが陶器の窯元から工人を招いて、奥羽の地元で陶器を生産しようと計画していた可能性があります。このように、奥州藤原氏は京都風の文物を購入するだけでなく、地元でも生産しようとの強い意欲を持っていたと思われるのです。

◆奥羽の独自性

「平泉文化」には、主体をなす京都風の文化要素の中に、奥羽の独自性が込められた例がいくつもあります。これは奥羽人の矜持でしょうか。例えば経塚です。この時代の北日本の経塚では、正式の方法では必ず使用される経筒と経筒外容器が省略され、経巻が壺や甕などの陶磁器に直接納められ、塚の中央に埋置される例が一般的です。又、

前沢の寺の上経塚では、経巻を納めた壺の周りに墨で法華経の経文を書いた「かわらけ」が充填された日本唯一の例が確認されています。辺境・蝦夷と見下されることの多かった奥羽人のプライドの発露でしょうか。

◆新しい奥州藤原氏像を

以上概観した清衡さんの「浄土実現政策」は極めて広範な領域に及んでいることがわかります。政策の総合性、また、その適用対象地域が「北海道南から奥羽全域」という広大な範囲にわたることを考えると、その意味は従来よりも重大に考える必要があるのではないのでしょうか。一部の研究者は、奥州藤原氏の統治は幕府制の前段階ではないかというほどです。

一九六〇年代頃までの奥州藤原氏、平泉文化の評価は必ずしも高いものではなかったように思います。「陸奥という辺境」の地の「蝦夷の豪族」が、砂金の力に任せて作りあげた「底の浅い文化」と

いうような。秀衡さんが無量光院の本堂の壁に「狩猟の躰」を描かせたことも、かつては「仏教への無理解ふりを示す」と評価されましたが、最近「武人である自分に対する深い自省の念の表れ」とみなされています。奥州藤原氏の新しいイメージが必要です。

数百力回を超える平泉遺跡群の発掘調査でも、「首都平泉」を防衛するための城壁・土塁・堀などの軍事施設は未確認です。恐らく無かったのです。奥州藤原氏は仏法や神の力で自らの地を守ろうとした「平和主義者」であつたのでしょうか。だからこそ頼朝の軍門にあんなにも簡単に下つたのです。世界各地で理不尽な戦闘が多発している現在、私たち東北人はそのことを誇りに思い、強く発信してもよいのではないのでしょうか。

あいはら こうじ

前えさし郷土文化館長

清衡さんのタネまき

山内 明美

宮城県南三陸町と気仙沼市にまたがる田束山（標高五二二メートル）は、九世紀に成立したといわれる修験の霊峰で、山頂には十一基の経塚群が見つかっています。松喰鶴鏡がはめこまれた経筒の中に朱書きの法華経（十巻）が発見されており、考古学調査報告によると奥州三代藤原秀衡による事業のようです。

東日本大震災後に行われた高台移転に伴う館跡等の発掘作業の過程で、アジア航測がおこなった赤色立体図の空撮によると、田束山の経塚群は十一基のみならず、発掘されていない経塚がまだまだあり、二十基は下らないのではないかと田中則和さん（元宮城県考古学会会長）はお話されていました。

岩手県平泉町から宮城県南三陸町までの距離は約六十キロで、気仙地域もかつては産金地帯であったこと

から、多くの修験の僧や金堀りが往来していたのではないかと考えられています。

また、日本最北の経塚といわれる青森県平内町の白狐塚遺跡では、水沼窯（石巻市水沼）の陶器が多く発見されていることから、宮城県北から青森県下北地域までのかなり広い範囲を、陶器や経巻を携えた平泉の役人や職人が往来を重ねていたことも偲ばせます。

古代東北戦争は、中央の大和政権とのあいだで三百年もの争いが繰り広げられ、無残に死んでいったエミシや官軍の犠牲を追悼し、平泉に「浄土」をひらくことが初代藤原清衡の戦後復興であったことは「中尊寺落慶供養願文」に書かれてある通りです。また、平泉には写経集団が組織されていたことを相原康二さん（元えさし郷土文化館館長）がお話されましたが、経塚の群は、浄土の願いと共に三百年戦争の傷みを包み込むように「東北」のあちこちに埋められたのではなかったかと、想像します。

経塚の分布は、単に奥州平泉の勢力の及ぶ範囲を示すものだけではなく、「抜苦与楽、普皆平等」の信念が、

法華経の言霊となつて土中深くに埋められ、浄土の未来を託されたのではなかったかと想像します。

昨年八月二十日に開催された金色堂建立九百年「浄土の風」シンポジウムには、岩手県内外から多くの方々が集まりました。奥山元照貫首、岩手県知事、平泉町長皆さん言葉が、浄土と平和で紡がれていたこと、平泉町の皆さん継承してこられた浄土のところが響きあうような時間でした。また、当日の岩手日日新聞社の三面広告には、岩手県民から寄せられた、パレスチナをはじめとする世界中で起きている戦争の犠牲者や度重なる各地の災害への悼みの言葉と平和へのメッセージが、浄土・平泉の清衡の願いと共に掲載されていました。平和の鐘の音が、あまねく世界へ響きわたるという想像力は、九百年の時空を超えて、確かに現代に生きるわたしたちへ届いていることを想います。清衡の信念に触れているのだと思うのです。

※

南三陸の百姓のこどもとして生まれたわたしは、土にタネをまいて生命が続いていくことの宇宙の不思議



や、その完成された仕組みに興味を持ってきました。

地球が誕生した四六億年前、この地球上には土がありませんでした。ドロドロの溶岩が冷え固まり、度重なる大雨によって地球の表面に海が形成され、海のなかに最初の生命が発生したといわれています。土は、生命が誕生した後に、その無数の生命たちの遺骸の堆積によってできたものです。土は、この世の一切の生命の死骸でできています。そして、わたしたちは、その土となった遺骸にタネをまいて、さらなる生命をつないで生きています。「土にタネをまく」ことは、人類にとって未来に願いをこめる普遍的な行為なのだと感じています。そう考えると、奥州藤原氏の浄土への強い思いが、土のなかに埋められ、未来へ託されたことはごく自然のことのように思われます。

しかし、近代に生きるわたしたちは、度々、この大切な土や海を損ねるようになっていきます。タネや願いを土に埋めて未来へ託すのではなく、人間が邪魔になったゴミや汚染物のような廃棄物をどんどん埋め続けるようにもなりました。こうした行為が、やがて海

や土壌の汚染となって、自らの生活を困難にしていける人間社会の歪みも起きています。こうした人間の営みの功罪について、東日本大震災以後はなおさらに考えざるをえなくなっています。

いにしえの人びとは、浄土を祈るときも、土ごと、海ごと祈ってきたのではなかったかと思えます。

いま、わたしたちの生きる世界は、スマートフォンが軍事技術の転用から生まれたように、メディアやテクノロジーの躍進がそのまま戦争へ適用されるような時代になり、ますます倫理観を伴った文化力が必要になっていると感じています。

平泉から世界へ届けられる浄土の風が、鯨音とともに、人間が懐深く抱え込んでしまった歪みをも解き放つほどの信念を持っているのではないか、と金色堂建立九百年目の日に想ったのでした。清衡さんが「東北」のあちこちに浄土のタネをまいたように、わたしたちも、願いのタネをまいていきたいと思ったのでした。

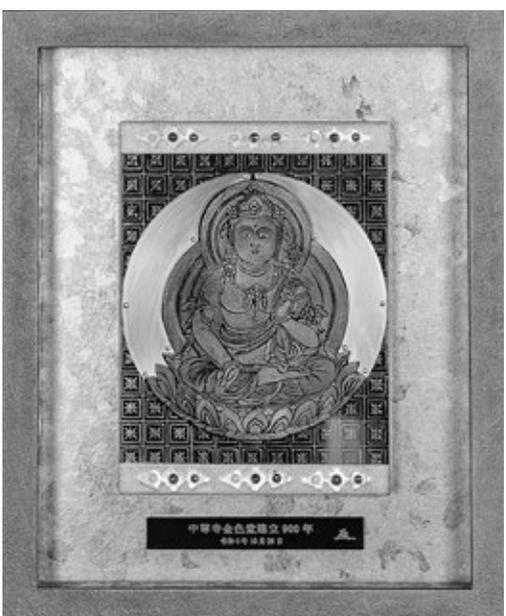
やまうち あけみ
宮城教育大准教授

円光仏に想う

伊藤 猛

はじめに……

昨年十月二十八日、藤原秀衡公の御命日に、私の描きました「円光仏に想う」と題した漆時絵パネルを、様々なご縁から中尊寺金色堂建立九〇〇年の節目の年に奉納させて頂きましたこと、誠にありがたく感謝申し上げます。



奉納 漆時絵パネル

中尊寺は、私が棲居し仕事をしております信州木曾より、車で七百キロほどの距離があり、なかなか訪れるのが大変なため、奉納の時度四度目の参拝となりました。過去四回の参拝の内、二度目の参拝は、私の大先輩時代の恩師であり、中尊寺金色堂の昭和の解体大修理の際、漆部門の修理復元に携わった大場松魚先生(人間国宝)が亡くなられた二〇一二年でした。その折に

は、二〇一一年の東北大地震の鎮魂と、亡き先生を偲んでお参りさせて頂きました。

大場先生からは、金沢美術工芸大学在学中、中尊寺金色堂の修理復元のお話をよく聞かされておりましただけに、私にとって中尊寺は、全国にあるどこのお寺より足を運び参拝することになった特別なお寺です。思うに、金色堂は、私達漆職人にとって、遥か昔の漆

工人の技量はもとより、昭和の大修理にあたった先人のあくなき職人魂を感じることができるので、平安時代のまさに黄金に輝く漆の建造物であり、その存在は、私にとって、何より漆の仕事をしていての励みであり、仕事に誇りを感じさせ、さらなる探求心をかきたてる存在です。

漆建築の最高峰

日本の漆建築文化の歴史を振り返りますと、その最高峰は平安時代にあると私は考えています。

中尊寺一帯の伽藍は平安時代末期に安倍氏と清原氏豪族の争いから、藤原清衡公の家族同士の凄惨な争いの後、戦乱で亡くなった人々への弔いと、戦い無き世を願い、清衡公が建立された塔を始めとしたお堂の数々だと言われています。

その中でも、金色堂には御本尊の阿弥陀如来座像を始めとする多くの立像が配され、お堂の内外は金箔で覆われ、内陣には金銀粉をあしらった蒔絵、南方の海から採られた夜光貝による螺鈿細工、さらには琥珀を

始めとした宝玉も埋め込まれるなど、荘厳な装飾が施されております。まさに漆建造物の頂点に相応しいと思います。さらに、その須弥壇の中には藤原四代の亡骸が漆塗りの棺の中にミイラとして安置されているという実にミステリアスで驚きのお堂でもあります。

ご奉納の際、本堂で秀衡公の御命日の法要をした後、金色堂内に入り、奉納した額装画を立て、ご焼香をさせて頂きましたこと、誠に恐縮の至りでした。そして、内陣を前に身を置いた時、何とも言えない静寂な空気に包まれ、現在の不穏な世界情勢と、私事ではありませんが、年老いていく九十五歳の母のことを想いながら、あらゆるものの平穏無事を祈らずにいられませんでした。

中尊寺金色堂こそは、それが醸し出す精神世界も含めて、平安時代から今日に至るまでの漆建造物の最高峰と改めて体感いたしました。

まだ捨てたもんじゃない 一期一会
さて、ここからは少し、私のこれまでの漆にかかわ

る活動や想いと、それがどう円光仏へと至って来たかを、お話しさせていただきますと思います。

小さい頃から漆に囲まれ育ってきた私は、幸運にもこれまで、様々な人、物との出会いから実に我儘な物創りをさせていただくことができました。振り返って、とても感謝しております。

大学の卒業制作では、「この世に生まれし者に幸あれ！ まだ捨てたもんじゃないさ！」の副題をつけた卒業制作を創り、それから待ち受けている厳しい人間社会に、その言葉を頼りに卒業しました。

それは今でも続いている私の精神的な支えのひとつとなつています。生きていれば嫌なことも多々あり、苦しみも喜びと同様にあります。そんな時、それでもまだまだ捨てたもんじゃない！ と自分に言い聞かせ、何とか今でも生かさせて頂いております。

そんな私ですが、美大卒業後、家業を継ぐべく、故郷の木曾に帰りました。それから三年経つのを待たず翌々年の正月二日に父が六十二歳で早逝しました。父は死の直前、五時間ほど前に、「一期一会」という書

を記し、私に残してくれました。

生前中、父は事あるごとに私に「お金は残せないが、人は残してやる。」と、言っていました。本当にそうなの…と、半信半疑でありましたが、亡くなってみると確かに大勢の人達が私の周りに居て、その後の人間関係におきましてそうそう困ることもなく、家業の仕事もそれなりにこなすことが出来ました。亡き父に感謝です。

人との繋がり 長野オリンピックメダル

美大を卒業して間も無く、現在プリンター製作等で有名なセイコーエプソン社(当時の諏訪精工舎)から、『金属に漆を塗ることが出来るか?』との問い合わせがありました。父の大学の後輩にあたる草間三郎様(後

一期一会

のセイコーエプソン社長)からのものでした。

卒業制作におきまして、少しばかり金属に漆を焼き付け塗ることをしてきましたので、「出来ると思えます。」と言うと、幸運にもその研究開発に携わることとなり、父の供養を兼ね、漆時絵提げ時計三千個を無事納品することが出来ました。

これも、父の残してくれた人の繋がりという財産から生まれたものだと思います。

そして、その技術と金属との出会いから、一九九八年には勝者の胸にかけられました長野オリンピック漆メダルの道が開かれていったのです。

メダルを手掛けることはある意味とても光栄なことでしたが、栄あるオリンピックメダルを私のような名もなきかけ出しの漆職人が提案者としてプレゼンテーションから交渉、本制作まで若き職人達と仕事することになったものですから、その後、それを巡る軋轢も生じ、苦しむこともありました。

人間とは善かれと思ってしまったことも、ある人間にとつては出過ぎになつてしまうこともあります。しか

夢に描いた漆のメダルが実現しましたことは、私にとつてとても貴重な体験でした。大きな誇りと共に責任を負うことになりましたが、この時の体験によって、私は、「自分の中で想像できることは、様々な困難は伴うが必ず出来る！」という確信めいたものを手に入れることがきたと思います。

さらに様々な人・物との出会い 〓 円光仏へ

今回の奉納で描きました菩薩像は、中尊寺金色堂内陣四本の巻柱に描かれた四十八体のうちの一体の菩薩像であります。その一体の菩薩像をあえて「円光仏」と命名させて戴きました。金属光背を配した菩薩像。円柱の巻柱に全てがまるく治まるよう、まるで太陽の中で菩薩様が光を放っているように見えたのです。その菩薩様も、すでに九百年という長い時を経て今では仏様に仲間入りしたことでしょう。

ところで、私は、二十年ほど前から大きなお仏壇ではなく、現代に即した祈りの形としてのコンパクトなお厨子を制作してきました。そこに自分なりのご本尊

し、そうでもしなくては国家の威信をかけてのオリンピックメダルは実現しなかったと思います。これまでに日本開催のオリンピックメダルは、先の東京オリンピックも含め、全て国主導の造幣局が制作してきているのです。



長野オリンピックメダル制作 動画



長野オリンピック入賞メダル

を入れれば、幕末、篤姫が薩摩藩から徳川家にお輿入れをした際に持参したと言われるお厨子のように簡単に持ち運びが出来、ご先祖を弔い、自分を律する仏壇になりうると思ったからです。

そんなある日、知人宅を訪ねましたところ、不思議な物を見せて頂きました。話を聞くと、それは中国西域にあるキトラ石窟の壁画から剥ぎ取られた観音菩薩像の盗掘品だと言うことでした。どこか怪し気な話でしたが、これもとてもミスティアスで気になり、当時制作したばかりの文字盤に蒔絵を施した腕時計と交換して欲しいと願い出て了承され、持ち帰りました。いまだ本物かどうかは定かではありませんが、とにかくそれが偽物であったとしても、私にはどうでもいいのです。早速、その壁画の菩薩像を黒い漆塗りの板に嵌め込み、厨子の中に納めました。これがなかなかいい。その前に小さな本尊でも安置してやれば最高！と厨子が出来上がり、ひとり悦にいらっしゃいました。

その後、二度目の中尊寺参拝から間も無く、美大の後輩が訪ねてくれました。何でも私の毎日書き溜めて

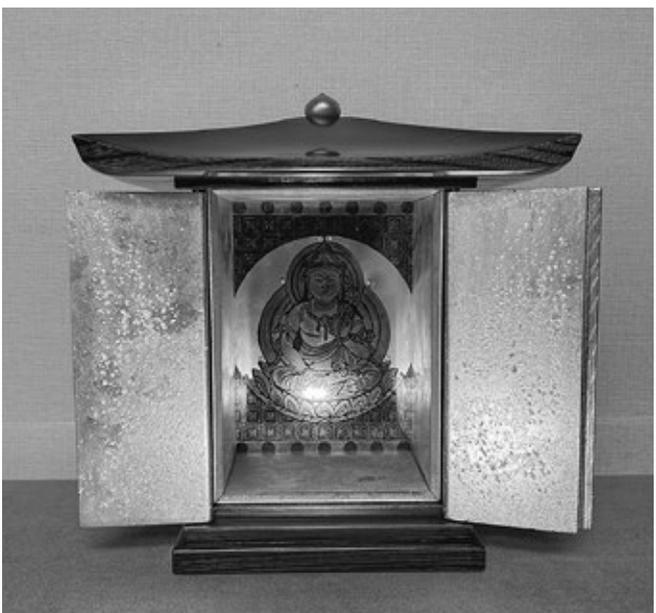
きた三百ほどのブログを読み、二度目の中尊寺訪問を知り興味深かったとのことでした。私はそれまで彼とは面識がなく、初めてお会いした人でしたが、彼こそ、中尊寺をはじめ数々の神社仏閣の修理修復を手がけ、今回の奉納にご尽力頂きました小西美術工芸社取締役の岩本元さんでした。

そこで、様々な話をし、厨子に納まっている壁画をお見せしていると、多賀城市にある東北歴史博物館に館にあたって彼が制作した、中尊寺の巻柱に描いた菩薩像の試作品の手板が、手元にあるので送ってくれと言ってくれました。彼が帰り、早速手板に描かれた菩薩像を送ってくれ、拝見すると、これが寸分違わず私の作った厨子の中に納まってしまいました。

そろそろ返さないと思いつつ、菩薩様も居心地が良かったのか居座り、それから五年が経過、東京での還暦の個展の際にお返しした次第です。

しかし、無くなってしまうと、空き家になった厨子が寂しいもので、今度は自分の手で出来ないものか？と私の中で想いが募ります。しかし、問題は私に描け

ことであれば平安時代と同じように、金塊を鏝で擦り下ろした自作の金粉を使用し、いつの日かもう一度、と考えている、そんな毎日です。



円光仏が納まったお厨子

るかです。地元の蒔絵師に聞いてみても難しい、自信がないという。なかなか難題でした。

時を経て、昨年春、一念発起し、国立博物館内にある岩本さんの工房を訪ね、やりたい旨を伝えました。そして、岩本さんが平成十一年に制作したというレプリカの中尊寺金色堂巻柱（一本の柱には十二体の蒔絵菩薩像が描かれています）を観るべく多賀城市の東北歴史博物館を訪ね、その足で三度目となる中尊寺を訪ね、これより制作したい意を伝えるためお参りさせて頂きました。

私に出来るかどうかは未知、ただ作ってみたかったです。が、やってみると何とか出来るものですね。人間の意思の力とは、まんざら捨てたものじゃないようです。そうして出来上がったのは、とにかく平安時代の蒔絵を再現したく、あえて今ある最も荒い金粉を使用しましたが、当時のような金塊を鏝で擦り下ろして作った金粉とは違うだろうし……。はたまた創建当時の金蒔絵の輝きの様子は、復元したものを観ても明確ではなく謎であり……。現在、出来る

最後に……

私は今年で六十七歳を迎えますが、これまで山深い木曾の地に住みながら、漆塗り時計、お椀をはじめとした器物、オリンピックメダル、オルゴール、厨子など、様々な物を創ってきました。それらも全て人・物・自然・旅での出会いから生まれてきたものです。

今回、その一つとして「円光仏に想う」と名付けた蒔絵菩薩像の額装画が加わり、奉納できましたこと大変嬉しく思います。そして、今回のご奉納に際し、私を中尊寺に導いてくれました亡き大場松魚先生、また、多大なるご配慮をいただいた岩本元様はじめ、中尊寺の皆さまに重ね重ね御礼申し上げます。

これからの残り少ない人生も、「一期一会を大切に、『困難でも想像することはきっとカタチにできる』という気概を持って、と思っております。

合掌

いとう たけし

「金色堂建立九〇〇年」を

振りかえって

菅原光聴

金色堂は天治元年（一一二四）、藤原清衡公によって建立（上棟）されました。令和六年（二〇二四）はそれから九〇〇年という大きな節目に当たり、様々な記念行事がとり行われました。

その皮切りとして、一月二十三日から四月十四日までの会期で、東京国立博物館において特別展「中尊寺金色堂」が開催されました。金色堂中央壇に安置される三十三躰すべての諸尊が東京までお出ましになり、中尊寺所蔵の宝物とともに多くの皆さまに拝観していただくことが出来ました。

会場にお越し頂いた方々の中には、折しも世界各地で絶え間なく続く戦争や、一月一日に発生した能登半島地震の慰霊と復興、世界平和を祈念したいとおっしゃる方が多かったのが印象的でした。

夏期は、八月一日から同三十一日までの会期で「国宝銅華鬘全六面展示」を行いました。これら華鬘は元来金色堂の荘厳具ですが、現在では国立博物館等に出品されており、全六面が一室に展観されることはめったになく、各面の技法や制作時期の違いをじっくり比較する上でも貴重な機会となりました。

秋期は十月二日から十一月二十六日までの会期で「中尊寺山内の古仏」展を開催しました。讚衡蔵収蔵庫や山内の支院に収蔵され、普段は一般公開されない貴重な平安の古仏を二期に分けて展示し、奥州藤原氏の文化遺産の奥深さに思いを馳せていただきました。

また、讚衡蔵展示室に8Kディスプレイを設置して先述の超高精細画像データを活用した動画を放映し、より精緻な金色堂の姿をご覧頂けるようにいたしました。実物の金色堂はガラススクリーンで保護されているため、内陣のディテールに肉薄することが難しいという長年の課題を解決する一助になれば幸いです。

金色堂棟木に記される建立（上棟）の日・八月二十

またこの展覧会にあたって東京国立博物館様、NHK様と中尊寺によって共同制作された超高精細デジタルデータのアーカイブを活用し、会場には実物大の8Kデジタル金色堂が「建立」されました。このデータは金色堂内部の美術工芸的価値をより一層知るための有効な手段となるばかりでなく、研究や修復など様々な目的において活用できる可能性を秘めた遺産といえるでしょう。

中尊寺讚衡蔵においては春期、夏期と秋期三回の特別展示を行いました。

春期は、一月十三日から四月二十四日までの会期で「金色堂の信仰と継承」と銘打って、明治三十年（一八九七）に行われた金色堂修理の際に描画された精巧な内陣の実写図をはじめ、金色堂に納められた中世の納札・笹塔婆・木製五輪小塔、松尾芭蕉や宮澤賢治など金色堂を訪れた文人に関する展示を行い、中世以降も人々の信仰を集め護持されてきた金色堂の一面を紹介しました。



金色堂建立九百年慶讚法要

日には「金色堂建立九百年慶讃法要」と「記念講演会・シンポジウム」が開催されました。

御来賓各位にご列席いただき、奥山元照貫首を導師として中尊寺一山大衆並びに中尊寺総代世話人会、福聚教会中尊寺支部の皆さん出仕のもと、中尊寺本堂にて法要が営まれ、その後参道を練行して皆で金色堂に参詣しました。

講演会では浅井和春先生（青山学院大学名誉教授・仏教美術史）、相原康二先生（えさし郷土文化館元館長・日本考古学）、山内明美先生（宮城教育大学准教授・歴史社会学）に金色堂・藤原清衡公・東北について様々な切り口でご講話いただきました。パネルディスカッションでは上記三氏にパネリストとして藤里明久師（毛越寺貫主）、コーディネーターとして佐々木邦世師（中尊寺仏教文化研究所所長）を加え、九〇〇年の間、浄土の風光が有形無形に平泉の地に伝承されてきた意義について熱心に論じていただきました。

十一月九日には「金色堂イマーシブツアー」高精度

三日まで延べ六日間にわたって行われた「三陸郷土芸能奉演」には三陸地方から六団体の郷土芸能保存会の皆様に演舞していただきました。心技体にみなぎる舞の力は三陸にも能登にも浄土の風をそよがせながら、九〇〇年前の清衡公の祈りへと通じているように感じられました。

みちのく浄土を欣求して九百年のいにしえに建立された金色堂。

それは二年後、あらゆる世界、あらゆる生命の安寧を祈って建立された中尊寺鎮護国家大伽藍の落慶供養へとつながっていきます。

最後になりましたが「金色堂建立九〇〇年」の諸事業にご協力いただきました皆様、金色堂に込められた浄土への願いに心をお寄せいただきましたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

（執事長）

CGでたどる祈りの空間」が中尊寺光勝院を会場に開催されました。先述の東京国立博物館様、NHK様と中尊寺とで共同制作された超高精度デジタルデータによるCG映像を大型スクリーンに映し出し、コントローラーを操作しながら自由に金色堂内を移動し、仏像や堂内荘厳、屋根や構造のディテールを金色堂研究の第一人者の先生方に解説していただきました。彫像の分野から浅井和春先生（前掲）、金工の分野から加島勝先生（大正大学名誉教授）、建築の分野から富島義幸先生（京都大学教授）をお招きしました。金色堂内の世界に没入しながら専門家の解説に耳を傾けるというかつてない体験に、会場からは感嘆の声が上がっていました。

そして、迦陵頻伽文華鬘の切り絵された「金色堂建立九百年限定御朱印」を好評のうちに頒布させていただきました。他にも、毎年恒例の行催事も「金色堂建立九百年」の合言葉のもと皆盛大に開催することができました。

特にも九月十四日から十六日、同二十一日から二十

「有馬朗人」

歳寒松柏の人生」より

講師 対馬 康子先生

ご紹介にあずかりました対馬康子です。

本日はこの伝統ある、平泉芭蕉祭全国俳句大会にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。とても光栄に思っています。

たくさんの方が、こうして暑い中をお見えいただき、私の話を聞いてくださるといふことで嬉しく思っています。

先ほど、芭蕉翁の供養祭に列して、とても厳肅な気持ちになりました。

昨日、平泉に参りまして、毛越寺・中尊寺をととも



丁寧案内していただきまして、私、平泉に来たのが初めてだったので、何もかもが素晴らしく、その真髄というか、そこに何があるのか、よく理解できました。

私は東京都荒川区南千住で「おくのほそ道」矢立初めの地の、千住大橋の近くに長く住んでおります。千住大橋といえば、

行春や鳥啼魚の目は泪

ですね。今はもう大きな通りにある鉄橋で、あまり風情もないのですけれど、ここを芭蕉さんと曾良が通ったんだと思いつつ、いつもしみじみと、隅田川を眺めながら渡っています。

芭蕉は、深川の庵から発って、千住の大橋で船を降りましたが、その足ですぐに草加に向かって行ったでしょう。南千住に住んでいるので、そのところを少しお話させてください。

曾良の随行日記から推察すると、七日間の時差があ

るんですね。

三月二十日に深川を出たとある。「おくのほそ道」では、三月二十七日に深川を出発したとあり、「謎の七日間」といふことが言われています。

船を降りた芭蕉一行は、その七日間の間に、近くに歴史ある素盞雄神社すさのおもありますし、旅の安全を祈願して、それから見送りの門人たちと厳しい旅へと向かう最後の別れを惜しんだのではないかというふうな推察しています。

「行春や鳥啼魚の目は泪」芭蕉は留別の句としてこれを残したわけですが、とても斬新だと思いませんか。

これは中国の漢詩「春望」の中に

時に感じては 花にも涙をなみだ濺ぎ別れを恨んでは 鳥にも心を驚かす

という詩がありまして、そうした要素を踏まえなが

ら、一步も二歩も進んだ前衛的と言いますか、たいへんドラマチックな設定です。しかもただ声を出して泣くではなくて、天に向かって叫ぶように啼く。

啼哭ていこくという言葉ありますけれども、鳥は大きな声を出して泣き、魚の目も涙で潤んでる。

この句は、(蕉門十哲の一人) 杉風への挨拶をこめているとか、大垣の結びの一句に呼応させたとか、涅槃図のようだななど、いろいろと解釈がされています。この句もその場で詠んだ原句がありまして、それは

鮎の子の白魚送る別裁

鮎の子は弟子たちで、白魚を芭蕉と曾良に見立てた別れの場面ですけれども、それから何年も経って、芭蕉がおくのほそ道から帰って、亡くなるまでの何年間もかけて、この「鳥啼魚の目は泪」の一句に仕上げたわけです。

推敲というよりもこれは創作です。

この一句を以って、芭蕉のおくのほそ道の文学性と

いただくことができました。

有馬先生は山口青郵門下の一人です。そして、その山口青郵先生の「人も旅人われも旅人春惜しむ」の句碑も、中尊寺の境内にあり、思いが一人です。

有馬先生は令和二年十二月六日、九十歳で亡くなられました。

コロナ禍の真つ最中で、直接ではないですが、やはり命を縮められたんではないかな、というふうな気がしています。父親を早くに亡くし、母一人子一人で経済的にも苦勞された先生は、六十歳の時の病気を機に一日一万歩は欠かしたことがなく、とにかく健康のために歩く、一日一万歩を徹底していました。超多忙だからこそ気をつけていました。そして、亡くなる前日までお仕事をされていて、見事に逝かれました。

代表句であるこの一筋の雪解水の句は昭和六十年作です。有馬先生にとって五十代半ばの、まさに物理学

いうところが、始まりとしての格調が高まっていったのではないかな、というふうに思っています。

というわけで、荒川区南千住の駅に芭蕉像がありまして、荒川区は芭蕉さんのご縁に、それから一茶や子規もこの地で俳句を詠んでおりまして、平成二十七年(二〇一五)に「俳句のまち」宣言をしました。

来年、十年になります。

前置きはそのくらいにしまして、今日お話しするのは有馬朗人先生についてです。

有馬先生の生涯の代表句は、皆さんご存知だと思いますが、ここ平泉での一句です。

光堂より一筋の雪解水

季節は違いますが、この光堂に来て、先生の生涯の一句を肌で感じ取りたいという思いから、なかなか機会がなかったんですけども、今回有難いご縁を

も俳句も、社会的な地位も上り調子で、国内外から確固たる高い評価と期待を集め気力に溢れた時代です。

エッセイ集にて「ひらめき」と題して、この作品のいきさつを書かれています。

もう十五、六年前の二月、私は東北大学へいつものように集中講義に出かけた。その週の日曜日の朝、二人の友人と中尊寺に行った。その一人はドイツ人であった。

雪を踏みつつ参道を光堂に向かってひたすら歩いて行き、光堂の近くまで着いた。

僧侶が二、三人で鍬を持って何かしていると思っ
て近寄ると、雪を分けて溝のようなものを掘っている
のであった。

一人の僧が光堂の入口へ行き、「いいか」と言う。
「いいぞ」と言う答えと同時に、光堂の前からこの
溝に沿って雪解水が勢いよく走ってきた。

その瞬間にできたのが「光堂より」の一句であつ

た。

今日来て何より幸せだなと思ったのは、嬉しかったのは、その、「いいか」って声をかけた僧侶の方が、今回いろいろご案内いただいた一山円乗院住職の佐々木邦世様だったんです。

この句に登場するご本人だと伺ってとてもびつくりしました。当時は佐々木様も若かったでしょうし、朗人先生も五十代の若々しさです。その声とともに場面がよみがえります。光堂の入り口からすつと流れて来た早春の雪解けの水、その一瞬に何かを掴みとったという。当事者の方とこうしてお会いできたことは、先生が引き合わせてくれたのだと思いました。

この句はですね。閃ひらめいたとか、瞬間でできたとか、詠まれた先生自身も仰っています。

が、果たしてそうでしょうか？

確かに閃ひらめいたんだと思います。瞬時に迷わずできた、というところは本当なんです。

句はいろいろ作り方がありますがそれでも、推敲に推敲を重ねる場合もあれば、その場で何の手も加えずに、すつと自分の中へ入ってくる句もあります。この句は

すぐできた、迷いなくできた句だということなんですけれど、「物のみへたる光、いまだ心にきへざる中にいひとむべし」という、芭蕉の言葉を思い出すわけですね。

これは時間的短さを指しているのではなくて、そのものを突き詰めて、そのものに対する美の感覚とか、感じる自分の心の交感と言いますかね、その瞬間が訪れた。

それが物の光が見えたということだと思います。神々しいまでの景色、神々しいまでに救いの手がすうつと入ってくるような、とても心の澄んだ、清い光を見たのだと思うのです。

実はもう一人、私の俳句の先生で、中島斌雄たけおという俳人がいます。

現在私が主宰している「麦」を創刊された先生で、『現

あると思っています。

雪解水の句に戻りますと、昭和六十年、先生が日本を代表する原子核物理学者として、また、俳人としてのさまざまな苦難の中で、ひたすら真実を求め、何か突き動かされるような思いがあったということを感じるのです。

追悼文としていただいた中に、こういうエピソードもありました。

昭和五十七年、米国での原子核の国際会議に出た時に、先生の自説を述べたところですね。凄まじい批判を浴びたそうなんです。

先生はまるで投獄されたように四面楚歌。でも自説を曲げず、その後も世界中でデータに基づき自説を展開された。

そして長い時間がたち、技術的に新しい実験施設が建設され、詳細なデータ解析が可能となり、なんと十五年も経って、実は先生の説が正しかったということ

代俳句の創造』という著書をはじめ、昭和の俳壇を牽引された一人です。芭蕉を中心に近世文学の学者でもありました。

そこで物の光というところを考えると、その斌雄先生は、デーモンの働きという言葉の本の中で紹介しています。ここでいうデーモンとは精霊、靈魂、冷静なほど訳してもいい。優れた進化の持つ、計り知れない思いにはデーモンの働きというものがある、と。

詩人は、悪戦苦闘を重ね、突撃に突撃を繰り返す。そして、あわや刀折れ矢尽きて斃たおれようとする。その瞬間、忽然として、わが内なるデーモンが目ざめる。

これは「物の光」について直接解説している言葉ではないですが、現代俳句の中のその一つの考え方として、このデーモンが降りてくるという所と、物の光を感じるっていうところと、何かこう共通するところが

が証明されるに至った、と。

有馬説が正しかったことが証明され、東京大学でのシンポジウムにて、監獄から解放されるイラストが紹介され、祝福されたといえます。

有馬先生はどんな方にもニコニコと平等に、訪れた方には本当に優しい言葉をかけられて、そして、人の句は貶けなさず、とても心の広い指導する先生でしたけれども。

そういう厳しい時期、自分の中でもすごく戦った深い葛藤の中で、俳人協会賞を受賞した『天爲』という句集を上梓し、この雪解水の句が燦然と存在した。

何もなく、この雪解水が流れてきたから詠んだということではなく、その後ろにある先生の不屈の人生を考えると、この一句の重み、この人生の深さというところの、それを乗り越えようとする研ぎ澄まされた心に、まさに光堂ならではの、光堂だからこそ、天啓とも言えるこの一句の意味が浮かんでくるのではない

た先生は、それから仕事で国内外を忙しくめぐり、そして俳句も沢山詠まれた。それは究極、日本とアジアの発展、世界の平和を願う旅でした。

「歳寒松柏」というのは、寒い冬にも松の緑は枯れないこと。寒い冬を通り越して、松の緑が萎しぼまない、緑が出てくるという「論語」の一章からくる言葉で、まさに先生の生き方だと思って、今日のタイトルにさせていただきました。

松の緑に例えて、逆境や苦難の時にあっても、志や節操を失わないということなんです。

私たちには穏やかで静かな先生でしたけれども、揺るぎない信念がある。物理学にしる俳句にしる、それから教育者としての立場にしる、難題と葛藤が次々襲ってきた人生だったと思うんですけども、最後まで全うされた。芯が通っていた。

それは何かというと、やっぱりこの世界平和に結局は行き着いたところだと思います。

かと思いません。

有馬先生の句は、日本的な美ということ認められるところがありますが、海外俳句の達人でした。

(中略)

歳寒松柏 物理学者・俳人・教育者として

帰化せんと思ひしは湖水る夜

山を裂き銀河へ辿り行く黄河

これは、『黙示』という最後の句集です。

有馬朗人先生は旅の俳人でした。国内海外問わず、いろんな旅をされていた。『流転』という句集も出されているように、それは生涯をかけて日本やアジアの発展と世界の平和を願う旅だった。

四十二歳の時、特別な待遇を約束された米国の職を辞し、日本の科学振興と俳句のために敢然と帰国され

「天爲」の令和三年一月号、これが最後の先生の作品とエッセイが載った号なんですけども、「新年に思う——日本の役割」と題したエッセイです。

いろんな国々で、いろんな戦争を繰り返している現実、中国の歴史とか、それからメソポタミア・エジプトの戦争を繰り返してきたということを、ずっと古代から繰り返している。その中で日本は、古代以来完全に独立を保ち続けた、稀有な国であるということを述べ、そして、

日本は古代より独自の文化文明を持ちつつ、中国の文化を大いに導入して発展した。

その上に、明治時代即ち十九世紀後半以来西欧の文化文明、特に科学技術を大いに学び、二十世紀に大きく発展した。即ち日本は、古事記や日本書紀から知られる独自の文化に、中国の文化を加え更に西欧の文化を学んできた。

その日本の使命は、中国とアメリカ西洋・西欧両方の文化文明を良く理解している国として、中国と

アメリカ・西欧の仲介役として、世界の特にアジアの平和と文化文明の発展に力を尽くすべきである。

とあります。昨日、佐々木住職様に中尊寺の梵鐘に託された藤原清衡公の「一音の覃およぶ所千界を限らず、冤えん霊をして浄刹に導かしめん」願文のお話を伺い、ここで有馬先生のお考えと、平泉の永遠と続いている平和の祈りというものが、こんなにも一致しているんだということが心に沁みました。

さあっと、雪解水が一筋に流れてきたように、この一句から四十年経つてもなお、こうしてその時の情景と共に遙かな思いがつかつてくる。とても清々しい気持ちになります。

昨日はですね、平和の祈りの日ということで、ちょうどイベントをしまして、小学生たちが平泉賛歌を上手に歌っていました。

光堂の前で、本当に森の中で、汗をかきながら小学生の合唱の人たちが平泉賛歌を歌っていたのですが、

澄んだ歌声に思わず涙がこぼれてきました。

いろいろなことがある世界ですけども、やはりその気持ちを失ってはいけないんだ、そんなようなことを改めて思います。

「冬を越えて、緑伸びる松」世界俳人、有馬朗人が願った世界の明日、俳句の明日、これからの俳句の未来、日本の未来ということを改めて考えさせられました。

地球といふ大いなる独楽初日の出

これは『俳句』新年号に先生が亡くなる前に出稿していた句で、心ならずも遺作となりましたが、有馬先生の笑顔が浮かびます。

大らかにその地球を見つめながら、そして世界を見つめながら、すべての人に教育を。教育こそ、平和の礎である。

そして、その文化ルール、いろいろな文化を認め合

うところに平和がある。

「俳句のような自然中心のアニミズム的思想に基づいた文化活動によって、世界に平和がもたらされ、貧困が克服させることを祈っている」(句集『鵬翼』あとがき)とおっしゃっていた。有馬先生が今ここにいらっしゃるような気がしています。

世界平和の日に平泉を訪れ、時を超えて流れる一筋の雪解水の光を見た思いです。

ご清聴いただいております。

夏萩のゆれ冤霊の鐘一打

康子



つしまやすこ

香川県高松市出身。

「麦」会長 現代俳句協会副会長

句集『竟鳴』など

川西大念仏剣舞

佐々木 邦世

岩波写真文庫『平泉』が発刊されたのは昭和二十七年でした。戦後間もない当時の平泉、周辺の景や、毛越寺の池の石組み、中尊寺諸堂の外観。だけでなく、金色堂内陣や金字経巻、一字金輪仏の尊容も。また、前々年に実施された奥州藤原氏四代の御遺体学術調査の様子も見えます。

そして、「衣川村に残された風習」 剣舞の写真が五枚収載されていました。そのころまだ小学生だった私の目にも白黒写真のように思い出が遺っています。

あの、力強い太鼓や笛の音が聞こえると、大人も子供も舞人の周りを囲んで見ていました。カッと口を開けた怒者の面、頭には馬の尾毛や鳥の尾羽を付け、夜な夜な現れる物の怪の姿です。手に綾竹を持って荒々しく舞っていると、そこに猿の面をつけたひよんな舞人が出現する。このお猿は仏の化身だと聞いて、子供達もそれなりに、何か感じていたように思います。

を着けて剣舞を奉納している。

衣川という所は、世に云う前九年合戦、征夷軍の将源頼義・義家の軍に抗して、それまで道の奥六郡を治めてきた安倍氏の拠点でした。史跡や、「一首坂」といった由緒地名も多い歴史の村です。剣を振りかざした亡者の舞「六人怒者」など、そうした故事伝承に由来しているわけです。

この「川西大念仏剣舞」が、国の重要無形民俗文化財に指定なつて三十周年、そしてユネスコの無形文化遺産に「風流踊」として登録され、旧冬、記念の催しが開催されて、私もご挨拶し参観させていただきました。

これまで保存伝承に係わった人への感謝のあと、「六人怒者」「魔王」、「入剣舞」「押込」と舞が披露され、全国的に少子化が心配される世の中、こうした風流踊が永く継承されるように、会場の皆さんが期待し語っていました。

剣舞のユネスコ遺産冬温し

ところで、「川西」の西、「大念仏」の大の意を汲んで、山河を望み思いを述べることにしたい。



岩波写真文庫
「平泉」紹介

以来、平泉春秋の藤原祭りや、八月の中尊寺の施餓鬼会には、太鼓を打つ「胴取」、笛の囃子方、「舞人」のみなきんが、隣村（現・奥州市衣川）から毎年来て、伝統の装束

関山中尊寺の境内は、東谷、南谷のように谷々呼称に支院坊名を留めていて、その西谷の山裾を衣川が流れ、北上の大河に注いでいるわけです。

西谷坊は、清衡公による中尊寺創建以来の経蔵別当職を継いできた古院で、大長寿院と称しその境内の端からは旧衣川村が遠く広く見渡せます。

佇つて、遙か西を望むと奥羽山脈が清涼に映えて、暫く心の和む思いがします。

平泉から行くと間もなく、衣川表とか西裏とか、平といった字名域が「川西」に当たって、剣舞の庭元佐藤家の住所でした。現在は、広く保存会によって、十代から八十代まで、多世代によつて継承活動されているようです。

「大念仏」の大は、物や形の大ききさではない。大混乱、大損害といった甚だしい程度を意味したものでありません。大は、一人も洩らさずに、念仏によつて落ちこぼれ無く浄土に往生できる、意味で受けとめられます。その伝承は、だれもが胸にある仏に気づいてもらう、心の遺産です。

（中尊寺仏教文化研究所長）

平泉へ里帰り—— 伊豆山神社の金銀字経

八重樫 忠 郎

平成十五年二月、日金山東光寺ひかみせんの石塔の調査を行うために、熱海駅に降り立つ。東光寺山内では非常に驚いた。参道の両側に、一石五輪塔が無数に並んでいたからである。早速調査を開始すると、紀年銘があるものは十六世紀後半に集中し、どうやら高野山から持ってきたものらしい。

調査を終え、予定通り伊豆山神社に向かう。この神社は、後に鎌倉幕府を開く源頼朝が、平家に対して武装蜂起するに際し、戦勝を占ったところである。温泉地熱海の起源であるお湯が噴き出す走り湯と、湧水を起源とした沢を陰陽として両脇に従える様は、まさしく荘厳な霊場の雰囲気かみを醸し出している。

そして境内にある市立の資料館に立ち寄った。館内には、

背後の山から掘り出されたという十二世紀の経塚遺物が展示されている。その素晴らしいものの中に、なぜかパネル写真が一点。不思議に思い近寄ると、それは断簡状の紺紙金銀字交書経であった。中尊寺経ではないか。これがこの経巻を始めて認識した瞬間である。後に数回訪れたが、パネルは一回しか展示されていなかった。

令和五年十月、資料館で展示している壺を実測しに行った時のことである。熱海市教育委員会の友人に仲介を願い、思い切って伊豆山神社の方に、写真の経巻を見せていただけないものかと頼んでみた。すると「今は写真も展示していないのに、なぜ経巻があることを知っていましたか」といいながら、快く出していただく。そして経箱を開けてみて驚いた。断簡ではなく丸々一卷だったからである。

その場で許可をいただき、立ち合いのもと、少しずつ開いていった。かつて濡れたことがあるらしく、前半部分はゴワゴワしている。それにしても、九百年前のものとは思えない紙のしなやかさである。中盤以降は眩まぶしいばかりの輝きだ。巻末までみたが、紀年銘や願主は記されていないかった。



日金山東光寺の五輪塔参道

静岡県指定物件なので、文化財としては認知されていたものの、中尊寺経の研究者間では、まったく存在を知られていないものだった。早速、平泉で展示をしたいと交渉を開始する。「来年は、金色堂建立九百年にあたる。その年に里帰り展示を実現できるならば、これほど喜ばしいことはない。」

平泉に戻ってから、中尊寺に行き、金銀字経が掲載されている図録類を買い求め、伊豆山神社に送る。また中尊寺経に関する論文もコピーして送付した。さらに熱海市教育委員会にお願ひし、熱海市からもプッシュしてもらった。こうして当館での展示が実現したのである。

まずは研究者に連絡をとり、調査を行った。仏教美術史学者の有賀祥隆東北大学名誉教授をはじめ、京都国立博物館、東北大学、中尊寺などそうそうたる顔ぶれである。その後、赤外線写真撮影、X線写真撮影も行い、数多くのことが判明している。

題字は「佛説无所怖望经」。佛説とは、仏様の教えのこと。現在は、希望とはよい言葉だが、仏教においては煩惱の一部とされ、すべての希望を超越して初めて真理に到達でき

る、という経意。巻装の表側には宝相華唐草文、内側には靈鷲山を背景にお釈迦様が説法する図が描かれている。この紙と経文を書いた紙をつなぎ合わせているのだが、X線写真で確認したところ、その継ぎ目から十八枚という文字を確認できた。経文は十八枚の料紙をつなぎ合わせているということらしい。実際のところこの経巻は、一度バラバラになったことがあるらしく、三枚分の料紙が失われ今は十五枚で構成されている。また赤外線写真では、墨書等は確認されなかった。

この金銀字経は、奥州藤原氏初代清衡が大治元（一一二六）年、中尊寺落慶供養に際して、奉納した紺紙金銀字交書一切経の中の一巻である。なぜ、紺紙に金銀字かというと、仏の世界は瑠璃（紺）の世界で、金銀など七宝で荘嚴されていると説かれているからである。すなわち経巻一巻が、まさに仏国土を表しているというわけだ。

一切経とは、すべての経のことであり、当初は五三九〇巻あったと考えられている。現在、所在が明確な金銀字経は、高野山所蔵の四三〇〇巻弱を合わせても四六〇〇巻ほどしかない。つまり今でも八〇〇巻程度の行方が分からない

いのだが、この度、新たに一巻発見されたわけである。

ところでこの経巻は、いつ頃に伊豆山神社に入ったのであろうか。明治初年の宝物台帳にはすでに記載があるため、それ以前ということになる。高野山の所蔵目録を見ていくと、前後の経巻はあるにもかかわらず、佛説无所怖望経のみが抜け落ちていた。中尊寺が所蔵していた時期にすでに持ち込まれたとも考えられるが、地理的条件からやはり日金山の一石五輪塔などとともに、江戸時代にもたらされた可能性が高い。

昨年は、金色堂が建立されて九〇〇年にあたる。清衡は、前九年・後三年合戦で肉親を失った人々の行き場のない怨念を鎮め、荒れ果てた大地を復興にいざなう象徴として、金色堂を建立した。奇しくも今は、たくさんの方々が亡くなり、多くの企業が倒産した疫病の蔓延から立ち直ろうとしている時。この時期に中尊寺の周年行事がやってきたのは、ただの偶然なのだろうか。

伊豆山神社で初めて金銀字経を見せてもらった時、異様なほどすべてがトントン拍子に進み、八メートルにも及ぶ長い経巻を開いて一気に巻き戻したのも、今思うと何だか

不思議な感じがしてならない。

この金銀字経の展示は、「清衡の平泉」と銘打たれ、ポスター等の題字は、中尊寺奥山元照貫首様に揮毫していただいた。このように企画展は、伊豆山神社をはじめ中尊寺や多くの方々のご協力のもと、かつてないほどの盛会裏に幕を閉じている。

すでに二〇年以上前になると思うが、故大矢邦宣平泉文化遺産センター館長が、高野山の調査から帰った時、こんなことを言っていたのを思い出した。何とか金銀字経を中

尊寺に戻していただけないものか、と頼んだらしい。すると、うちだからこそ現在まで守り伝えられてきたので、平泉にあったならどうなっていたか分からない。と返されたという。

大矢館長は、すごく口惜しそうに話してくれた。伊豆山神社の金銀字経、彼はどんな想いで見てくれただろうか。

やえがし ただお
岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター



企画展「清衡の平泉」のポスター。

平泉観光の新時代

ーインバウンドがもたらす

文化交流の深化

山平功二

平泉の地に根付く仏教文化の精髓は、今や世界中の人々の心を魅了しています。二〇二一年の世界文化遺産登録から十二年以上が経過し、私たちの誇る浄土思想の世界観は、より多くの国々からの来訪者によって深く理解され、共感を得るようになっていきます。

❖世界に開かれる平泉の扉

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、観光需要は大きく様変わりしました。これまで平泉を多く訪問している国は、台湾をはじめとするアジア圏がほとんどでした。コロナウイルス感染症の拡大が収まり、外国からの観光が解

禁され平泉駅前で見受けられたのは、フランスから来た老夫婦だったのを今でもよく覚えている。



2024年3月キュンパスの運用期間にも外国人観光客の姿が

最近では、アジア圏に留まることなく、ヨーロッパ、中南米からも来ている。近年の調査によると、平泉地域への外国人観光客は着実に増加傾向にある。ニューヨーク・タイムズ紙の「二〇二三年に行くべき五十二か所」に盛岡が掲載されたのも大きな要因になって増えている。

特に中尊寺は、岩手県内のインバウンド人気観光地ランキングで上位に位置し、その美しい建築様式と深い精神性が高く評価されています。金色堂を中心とする伽藍の荘厳さは、言語や文化の壁を越えて、訪れる人々の心に深い感動を与えています。

❖外国人観光客の声から見える新たな価値

海外からの来訪者たちが特に感銘を受けているのは、次の三点です。

一、浄土思想の空間表現

自然と建築の調和

精神性と美の融合

二、四季の表情

紅葉期の庭園美

雪景色の幽玄さ

三、文化体験の深さ

写経や座禅体験

仏教文化の体験的理解

■今後の展望と課題

インバウンド観光の回復に伴い、より深い文化理解を促進するための取り組みが求められています。多言語での案内の充実、そして何より、平泉の精神性文化の本質を伝えることが重要です。

世界遺産としての価値を保持しながら、いかに現代の観光ニーズに伝えていくか。これは私たちに課せられた重要な使命といえるでしょう。

◎具体的な取り組み例

一、文化体験プログラムの充実

体験プラットフォームの確立（体験プログラムの

観光協会HP上での一元化）

二、情報発信の強化

SNSを活用した魅力発信

海外メディアとの連携



2024年10月に開設した平泉観光協会HP「ひらいずみナビ」体験予約ページ

私たちは、平泉の文化的価値を世界に向けて発信し続けることで、より多くの人々に浄土思想の深遠な魅力を伝えていく必要があります。それは、単なる観光地としてではなく、世界の文化遺産として、その普遍的価値を共有していく営みなのです。

これからも、国内外の来訪者すべてに対して、平泉の精神文化の本質的な価値を伝えられるよう、私たちは努力を重ねていきたいと考えております。

一般社団法人平泉観光協会 事務局長

訪れる人々と

地域を結ぶ 「文化の架け橋」

中尊寺坂下ガイドさんインタビュー

中尊寺坂下ガイドさんは長きにわたり中尊寺の魅力を訪れる人々に伝え続けてこられました。赤い制服に身を包み、参道・月見坂の風景の一部として親しまれたその姿は、中尊寺を訪れる人々にとっての「中尊寺の記憶」として刻まれていることと思います。さらに、地元で育った私にとっても、月見坂を歩けばいつも目にしていたガイドさんの姿は、幼い頃の思い出と今の情景をつなぐ大切な象徴であったのです。

昨年末をもって坂下ガイド事務所がその歴史に幕を下ろすという知らせがありました。長年にわたり中尊寺のガイドを担った役割の大きさを振り返れば、坂下ガイドさんたちが果たしてきたことは単なる観光案内を超え、訪れる人々と地域を結ぶ「文化の架け橋」であったように思います。坂下ガイドさんたちが長年にわたり伝えてこられた数々の物語や思い出を、これからの世代へと残していくた



中尊寺坂下ガイドさん（令和6年）

めに記録として綴りたいと思ひ、坂下ガイド事務所を訪ねました。本日は、長きにわたり中尊寺を訪れる方々を案内されてきたガイドさんたちに直接お話を伺ひ、その歩みや思いを振り返っていたかどうかと思ひます。

(訪問談話 破石晋照)

それでは、よろしくお願ひいたします

晋照…私(四十五歳)にとつてガイドさんは子供のころから毎日のようにお見掛けしておりました。私が生まれる前から中尊寺を知っているガイドさん。ガイドを始めた頃の思い出などあつたら聞かせていただけますか。

ガイド…このガイド事務所が公式にいつ始まつたのかということは私にはわからないのですが、先輩たちは昭和二十五年か…あるいはそれより前から観光ガイドをしていたと言つていました。当初は平泉の駅前にガイド詰所があつて、そこからお客さんと中尊寺まで歩いて来てガイドをしていました。トテ馬車に乗つて移動をしていたこともありました。もう五十



トテ馬車と当時の平泉駅

年以上前のことです。お寺の坂下に移つて来たのが昭和四十年代でしょうか。多い時は二十五人ぐらいのガイドが在籍して、たくさんのお客さんのガイドをしていました

晋照…ずいぶん多くの方が在籍していたこともあつたのですね。初めのころはどのように仕事や心構えを学ぶ

のですか？

ガイド…私が入つてきたころは、先輩に本を預けられ、それをひたすら読むというのがガイドの第一歩でした。奥州藤原氏はもちろん、中尊寺の歴史すら曖昧ですから、文字通りゼロから勉強しました。ある程度の知識を身に付けたら、今度は先輩の後についてお客さんと境内歩き、言葉遣いや気遣いを学んだと思います。境内案内の基本的なことは頭に入つていますが、接客業はお客様の気持ちがあつてのことですから、実際には、ガイドをしながら学ぶことのほうが多かつたです。

晋照…そのころ、初めてガイドした時の思い出など聞かせてください。

ガイド…実は…あまりよく覚えていないのですが、確か最初は経蔵のことをとにかく覚えて、経蔵だけを私が案内して他は先輩にお願ひしていたと思ひます。境内全域の案内を任せられるのはずっと後だつたと思ひます。

晋照…やはり、経験と知識をコツコツと積み上げることが大切なのです。



中尊寺坂下ガイドさん(昭和48年の頃)

ガイド…そうですね。観光ガイドは単に観光地を案内するだけでなくて、その土地の文化や歴史、地域独自の習慣について深く理解し、それを分かりやすく、そして魅力的に伝えるスキルが求められるわけですから。

晋照…ハイシーズンは朝から夕方まで姿をお見掛けしますが、一日に何度ぐらい案内をなさるのですか？

ガイド…多い時は三度くらい登ります。いまではなくなりましたが、昔は「朝食^{あさじゆく}」と呼ばれる時間帯のガイドがあつて、その当番になつた時には朝早く平泉駅前に集合して、夜行列車で来られた団体さんを待ちかまへ、中尊寺坂下まで案内をして、朝食を召し上がってもらい、そこからお寺が開くのを待つてガイドをしていくこともありました。今と違って、バスで町道を通つて中尊寺に上がる人が少なかった時代です。駅前から伽羅御所、高館を歩いて中尊寺に来る、中尊寺を案内したら一緒に毛越寺まで歩いて、そして最後は駅でお見送りをしていました。それが普通だった時代です。

晋照…交通手段のあり方が変わると、観光のスタイルもずわれるようにガイドをするようになってきました。私たちのガイドがご縁で本当に何度もいらつしやる方もいらして、中には、ずうつと手紙のやり取りをしている人もいます。心に残っているのは、修学旅行に来た生徒が、中尊寺がとても楽しかったからと、家族をみんな連れて再び来てくれたことですね。平泉の国宝や重要文化財が人をひきつけ感動をさせます。それに加えて、お客様には、このお寺の境内老杉や全体を楽しんでほしいとか、平泉全体を通して「好いところだな、また誰かと来たいな」と思つてくれたら嬉しいです。そう心がけています。

晋照…中尊寺とおお客様の心の架け橋になつていただいているガイドさんにはとても感謝しています。中尊寺では季節々々に、いろいろな記念行事など行つていますが、今でも心に残つていることなどありましたら……。

ガイド…五十年ぐらいやっていますから、本当に色々なことがありましたけど、昭和の大修理の際はお客様が本当にたくさんいらつしやつて、金色堂拝観を人

いぶん違うものですね。私はそのような団体さんを聞いたことはありませんでした。

ガイド…そのあと、高速道路ができて旅行ブームが到来。東北を旅行するお客さんが一気に増えた時代がありました。あの時代はいろいろなお客さんがいらつしやいました。社員旅行のバス中で、ずいぶんお酒をお召し上がりになられている方がいらつしやつたのですが、ガイドをしているうちに姿が見えなくなつてしまつた。これは大変だとガイドも添乗員もみんな総出で探したのですがなかなか見つからなくて……。やつと見つけたと思つたら、そのお客さんは中尊寺の坊さんのお家に入つて縁側で昼寝をしていたんです。あの頃、昭和の時代の旅行は今みたいに慌^{あわ}ただしくなくて、みんなのんびりしていたような気がします。

晋照…そんなことがあつたのですか(笑)。そのようなトラブルなど起きないように、皆さんが心掛けていることなどあつたら教えてください。

ガイド…常におお客様の気持ちになつて「また来たい」と思数制限しながら拝観していただいてびつくりしました。それから、今東光貫首がオープンカーで晋山された時も覚えていますよ。あの時は報道の方もたくさんいらつしやいましたし、著名人もたくさんお見掛けしました。坂下でオープンカーから降りて月見坂を輿に乗つて晋山されたんです。

近年は、東下り行列で源義経公役に滝沢秀明さん(タッキー)がいらつしやつたときですね、民族大移動みたい、前日からすごい人出でした。電車に乗れなくて一ノ関駅から歩いてきた人もいらつしやつたようです。

東日本震災の時には、日本中いろいろなところからお見舞いのお電話や手紙を頂戴しました。あの時もガイド事務所を続けられたのは、皆様からの多くの励ましのおかげです。

そして、世界遺産登録なつた時は、また多くのお客様がいらつしやいました。あまりの混雑に大型バスの駐車場がいっぱいで、みんな、坂下から歩いて上がりました。個人のお客様の中には、電車の都合で

やむを得なく拝観せず帰った方もいたと思います。
晋照…日本中・世界中の方と御縁ができるというのも観光業の面白いところじゃないですか？

ガイド…日本中からお客様がいらつしやいますが、平泉とご縁のある土地は多いです。ですから、三重の方がいらつしやったら芭蕉さんの話をしたり、和歌山からのお客様とは弁慶の話をしたり、そんな会話を通しながら仲良くなって、お互いに行ったり来たりすることがあります。これは何より楽しいことだと思います。

晋照…もしかするとガイドのみなさんは誰よりも中尊寺を楽しまれたかもしれませんね。毎日山を上がって、お寺の行事にもいつも顔を出されて、熱心に勉強をされて。

ガイド…そうかもしれませんね、境内のことは道端に咲いてる花一つのことからよく知っていますよ。今いらつしやるお坊さんも、子供のころから性格も含めて大体知っています(笑)。私たちはみんな中尊寺が大好きなんです。今年、金色堂建立九百年ですが、

赤澤鎧剣舞

平泉中尊寺との繋がり

平山 徹

令和六年九月、世界文化遺産登録の平泉中尊寺金色堂の建立九百年記念「三陸郷土芸能奉演」に赤澤鎧剣舞が招待をいただいた。天治元年(一一二四)に建立され九百年にあたるという。平安時代の末、奥州平泉において初代清衡公、二代基衡公、三代秀衡公、四代泰衡公と、約百年間、平和都市浄佛国土を建立された。久しぶりの中尊寺公演である。思えば平成二十三年三月、あの未曾有の津波東日本大震災の年の十月二日、東北復興祈願、三陸郷土芸能奉演に出演し鎮魂の舞赤澤鎧剣舞を奉納した折、古式ゆかしく、兵どもらしく月見坂から隊列を組み道中囃子に合わせ行進しました。

外国の人、世界遺産平泉を訪れた観光客は、煌びやか

その間にどれだけの人々の心を支えてきたかを思うと、本当に感慨深いものがあります。金色堂はもちろん、中尊寺全体が日本の歴史や文化、そして信仰を象徴する大切な場所であり続けたからこそその九百年ですし、数十年間ではありますが、その歴史に携わり一緒に過ごせたことを嬉しく思っています。坂下ガイド事務所は二〇二四年でその幕を閉じますが、中尊寺がいつまでも参拝されるお客様に楽しんでもらえる、素晴らしい世界遺産であり続けることを願っています。

晋照…ありがとうございます。中尊寺を好きだと言っていただけのその気持ちですが、きつと訪れる方々にも伝わっていたのではないのでしょうか。訪れる人々は、中尊寺の歴史や景観だけでなく、そこに携わる方々の温かな思いを感じ取り、それがまた特別な体験となったのだと思います。中尊寺と坂下ガイドさんが一緒に培った日本中の絆が、これからも人々の心を繋ぎ続けることを願っております。これまでの活動、本当にお疲れ様でした。



三陸郷土芸能奉演

な鎧を纏った戦仕様の出で立ちが珍しく、盛んにカメラを向けていました。

その二年後、また、同趣旨の芸能奉演にも公演させていただきました。いただいた経緯があります。あの日は朝からの台風十八号の来襲で、境内での演舞はもちろん、大船渡から平泉

までの交通が可能かどうか危ぶまれました。その様な状況でしたが、貫首様から中尊寺本堂で濡れた草鞋のままをかまわないから是非奉演していただきたい、との強い要請でした。それならばと、恐れ多くもご本尊の前で奉演した記憶が鮮明にあります。

岩手県内の民俗芸能は、藩政時代のかかりから、盛岡周辺の南部藩と、宮城県境の気仙地方を含めた伊達藩では、同じ部門でも異質のがあります。私が住んでいる気仙地方の大船渡市は、北上市の城内から東へ奥州市江刺、住田町の北側を通り釜石市までの百三十キロの藩境線に沿って、北は南部領、南は伊達領に統治されていました。南部二十万石は、岩手県の三分の二を占め、青森県の八戸や秋田県の鹿角地方も含まれていました。伊達六十二万石は、岩手県の三分の一と、中核となる宮城県全域、福島県の一部を占有していました。したがって、県内陸部の民俗芸能も同じ部門の呼び名でも所作等に違いがあります。

気仙地方は伊達藩直轄であるため、南部地方の剣舞とは異質で、気仙地方では「ケンベア」と愛着をもって呼

ばいます。剣舞の由来伝承には大きく分けて三説があるとされています。

一つは、義経一族の亡霊説

一 つは、義経一族の亡霊説
 胆沢（朴ノ木沢念仏剣舞など）
 文治五年（一一八九）藤原四代泰衡は平家一族を滅びさせた功勞の源義経を兄頼朝の命により衣川館に討ち取った。その恨みから義経一族は亡魂となり高館の城壁に夜ごと現れ城内の婦女子を悩ませた。泰衡も脅えおののく人達を捨て置くわけにはいかず、中尊寺一山の僧侶に申しつけ亡魂退散を祈らせた。祈祷七日七夜に及んだ時、何処からともなく一匹の猿が現れ、亡霊と共に拍子面白く踊りながら亡魂の心を和らげた。この猿が亡魂を済度し退散させた様を踊り化したものと云う。

二つ目は安倍一族の亡霊説

二 つ目は安倍一族の亡霊説
 衣川（川西大念仏剣舞など）
 初代藤原清衡の時代、前九年の役で滅亡した安倍一族の亡魂を一匹の猿が現れ物の怪に交じり念仏踊りながら

んでいます。

藩政時代、剣舞が赤澤村（集落）に移入されたことを思慮致しますに、奥州では古くは奈良時代に砂金が採取され東大寺大仏の建造のため朝廷へ多量の金が献上されています。高田からは玉山金山、矢作の雪沢金山、米崎の重倉金山、住田では世田米の野尻金山や、今出山金山など、このように気仙地方も中世・近世は鉱山の歴史を辿ったと云っても過言ではありません。

前九年合戦時代の活躍により滅亡した安倍氏に代わり奥州を支配したのは出羽の清原氏、次いで安倍氏の流れをくむ藤原氏でした。その拠点となるのが平泉と気仙地方の産金にかかわる交流が主だったようです。

気仙川・盛川筋の砂金が平泉へ、そして京都へ運ばれたことが気仙郡を平重盛（清盛の嫡男）に荘園として寄進したのでした。

こうした物流交流の中で風流踊りなるものが華やかなる都、京都などから気仙にも移入されたものと推察されます。民俗芸能もその一つで、歌舞を通して念仏供養など念仏踊りの所作が考えられます。

亡霊を退散させた、との伝説もある。

三つ目は平家一族の亡霊説

三 つ目は平家一族の亡霊説
 大船渡（赤澤鎧剣舞など気仙地方に多い）
 平家討滅の功勞者である源義経が兄頼朝と不仲になり義経討伐の軍勢が差し向けられた。義経が海路四国へ落ちんとしたとき、平家一族の亡霊が現れ、一行を苦しめたのを高僧が経文を高らかに読んでこれを退散せしめたと云う故事に因んで出来た様を舞踏化したもので亡魂の鎮魂を意識したものと云う。

赤澤鎧剣舞は三番目の平家一族の亡霊退散を念佛で済度し亡魂を退散させた故事に近く、盂蘭盆会に祖先の供養と初盆に各家庭を訪問して仏前・墓前で廻向供養する行事が古来伝承されている。

赤澤鎧剣舞は、平家一族の亡魂を念佛で極楽浄土に往生させる物語です。

平泉高館義経堂にて赤澤鎧剣舞奉納

その源義経の遺徳を偲びながら、高館義経堂境内で平

家武将の所作、鎧・装束を纏い赤澤鎧剣舞を奉納しました。敵の大將ながら悲運の最期を遂げる義経公の戦績は輝かしいもので、その戦功は一の谷の戦いで鹿も下れないと云う断崖を馬と共に急襲し勝利した（鴨越の逆落とし）。屋島の戦いでは暴風雨を突いての急襲攻撃や、敵対する平家の船団で那須与一の扇子を的とした勝利。そして長門壇ノ浦で勝利したわけです。

しかし、義経は兄頼朝との不仲を問われ（文治五年四月三十日）三十一歳、平泉高館で最期を遂げた。

源氏の総大将源義経公の仏像を祀る義経堂に、平家一族を演じる我々舞人が手を合わせることは、歴史の巡り合わせではなからうかと、八百年前の武士の息吹が感じられました。

藤原氏四代の偉業

後三年合戦後、清原氏の領地を継承した清衡は奥州江刺の豊田の館から平泉へ処点を移し、中尊寺一山の造営に着手、金色堂を上棟され、令和六年で九百年の節目となりました。

清衡公が、前九年の役・後三年の役で戦禍にまみれた戦没者の追善、すべての人々を差別なく平等に極楽浄土へ招魂させることこそ自分の務めとし、藤原氏四代にわたる平和都市が百年間続いたわけです。

赤澤鎧剣舞は、これまで四度の中尊寺金色堂奉納を齎行しています。清衡公の願い、全ての民が分け隔てなく平等に極楽浄土へ導かれることの願いが、平家一族を舞踏化し演じている我々が奉演で強く感じるところです。

ひらやま とおる

大船渡市郷土芸能協会会長

赤澤芸能保存会会長



令和6年9月16日 中尊寺にて

縁を生きる

菅野 宏 紹

まだ若いと思っても、四捨五入すると還暦に近い年齢になった。三十歳代、四十歳代は辺りを考えずに進むだけだったが、流石にこの頃は体調も精神面もがむしやらにはいなくなつた。前後左右を考えるとどこか、体調維持に神経を使うようになってきた。このような中で、最近思うことは「人との縁」についてだ。今日まで生きてこれたことは、多くの「人との縁」が作用しているのだと感じた。二十歳代に結んだ縁で現在でもお世話になつていることもあれば、最近の知遇で得た縁もあるが、人生の中で「人との縁」の大切さを身に沁みて感じる。

過日、中学生時代の恩師の訃報に接し、通夜に参列してお焼香させて頂いた。沢山の思い出がある先生で、御棺に眠つているお顔を拝見し、在りし日のお姿を思い浮かべて寂しさを感じた。この先生との「縁」がなかったら、今日のように仏教音楽の御詠歌の指導に携わることもなかった

者にとつて邪魔なものだろうか。決してそうではないと思つている。昨今、SNSの発達に伴つてパソコンやスマートフォンを相手に日々を過ごしている人も多いが、これらも人との縁を伝つていることだと思つている。

岩手県二戸市浄法寺町に東北の最古刹、八葉山天台寺がある。中尊寺貫首であられた今春聴大僧正や、作家の瀬戸内寂聴さんが住職を務めた御寺であるが、私は、仏教青年会当時に、研修で天台寺に伺い、当時の寂聴御住職から濁酒をお土産に頂いたことがあった。住職のお居間の入り口に、小さな冷蔵庫があり、濁酒がたくさん入つていたようであった。濁酒をいただいでから二十数年後の現在、そのお寺を住職として預かる身になつている。このお寺の地元浄法寺小学校には天台寺保存会という児童の組織があり、天台寺境内でミニガイドを実施、アジサイの植栽を行うなど活発な活動をしてきている。私自身も平泉小学校文化財愛護少年団のOBで、そういった児童の活動を応援すべく、最近、両小学校児童の相互交流を始めることが出来た。昨年は平泉の児童が浄法寺町を訪れて現地の児童と交流

ろう。

大学在学中は、宗門の大学ということもあり、天台宗内生や他宗派の学生とも「縁」を得て、今日でも親交させていただいている。

御詠歌といえば、平成初期に当時大正大学に勤務していた、父兄会会長をしておられた東京の天台宗寺院御住職とカラオケにお供して、一曲……二曲歌つたとき、「御詠歌の稽古に来てみないか」と誘われたのが、御詠歌に携わるきっかけとなつた。

さて、話の向きは変わるが、私はアナログ人間である。デジタル社会に向かないと自認している。しかし、デジタルを全く否定するものではない。デジタルはアナログの足りない部分を補完してくれていて、人は大変便利に生活をしていると思つている。人間関係も今やデジタル的でなければ通用しなくなつてきている。

けれど、「人との縁」は、デジタル社会では不要なものであろうか。現代にデジタルを駆使して便利に生活してい



天台寺 小学生による境内植栽

し、今年は、浄法寺の児童が平泉町を訪れて交流する計画である。特に本年は、二戸市の特段の配慮もあり、天台寺境内のライトアップや遊歩道整備など、市として天台寺周辺の整備に力を入れていただいている。子供たちも張り切つてアジサイ整備に汗を流してくれた。これも人との縁でしょう。天台寺でも、春秋例大祭では十数名の御詠歌愛好の方々や寺に伝わる霊場御詠歌を奉納している。

辺りの縁が縁を繋いで、ありがたいと感じる日々である。

(天台寺住職・当山利生院住)

どうぞ、中尊寺通りへ

遠藤 セツ子

二〇二二年八月一日午後七時のことです。

私の住む中尊寺通りにたくさんさんの灯りが一斉にともり、胸が高鳴りました。温かみを感じるオレンジ色の街路灯です。この幻想的な光景を友人たちにも見せたくて翌日夜一緒に歩くとみんな驚き、歓声が上がりました。

三代藤原秀衡公の御堂だった無量光院跡区間は浄土池の雰囲気損なわないように片側のみに街路灯を設置、石敷きの路面もここだけは池と調和させてアスファルト舗装です。

無量光院跡から中尊寺への道は、十二か所で樹木・植物がセットの植栽スペースに「中尊寺通り」と書かれた行灯型の街路灯が設置され、緑が人々の気持ちを和ませ、秋から初冬は真つ赤なモミジが心を温めています。

で道路の拡幅や安全な歩道をつけるには無理があり、歩行者と車が共存できる道、車はすれ違う時に歩道スペースに入ってもよい、という考え方の「歩車共存」とし、歩道スペースとの間には縁石を置かないこととしました。一部区間で路面にテープを張って車道を狭くする社会実験もしました。

○八年六月から通りの三地区で住民検討会を開きました。歩道空間が狭い、舗装路面の老朽化などの課題に対し、考えられる整備方針やそれぞれのメリット、デメリットを示して皆さんの意見を聞くためでした。

すべての会場に参加したある方は熱い思いをとつとつと語りました。

「なぜ観光客は中尊寺、毛越寺に来るのか。金色堂や仏像だけではなく、緑豊かな自然と共生しているからだろう。外国人が一番好む道は中尊寺から毛越寺への山の中の道、いわゆる通称「観光道路」で、他の観光客も平泉に求めているのは『田舎町』の平泉ではないか。それを感じてもらうためにもまちの中に緑を増やしたい。陽ざしを遮るような街路樹を植えてその下で休めるような通りに。わき

これは中尊寺通りのまちなみ整備事業の賜物で、さらに翌三年三月にはすべての電柱が撤去されました。電柱も、電線も消えた通りから見る青空のなんと広いこと！ 大きいこと！ 当初実現できると思えなかったこの景色。沿線の人に限らず誰しもが喜んでいました。

ふり返ると、平泉町は大揺れの市町村合併問題時に単独の道を選んだことで、○五年新たに就任した鈴木清紀町長は施策の一つで「町の自立」について宣言しました。住民参加型のまちづくりとして町民が企画段階から実践までに参画する「町の自立施策推進プロジェクト」を各分野で組織化する、と。プロジェクトチーム（PT）への参加募集があり、私はその一つである「中尊寺通り整備PT」に応募。五月三十日六人で始動しました。平泉バイパスの全線開通が見通せていたことで、開通した後の県道は町道になるのでその前に県に整備してもらおうと、車道の幅や歩道のこと、植栽のこと、電線地中化のこと等を話し合いました。

○七年、県、町、交通関係者等も加わり「中尊寺通りまちなみ整備検討会」が発足。店舗や家が建て込んでいるの

道、小路も含めて、もつと魅力あるまちづくりを考えていこう。」

いろいろな方の話を聞いて一番心がけなければいけないのは、現在の私たちの便利さか、将来の平泉の人たちに良い景観を引き渡すことができるか、だと思いました。

一一年六月二十六日、世界文化遺産登録が決定し、七月二日には平泉駅前で世界遺産登録を祝う町民報告会が開催されました。平泉まちてらす会は無量光院跡の池の周りに夢灯りをともし、東中島では町内八つの寺の和尚さんたちによる祖先と東日本大震災での犠牲者を供養するための法会が行われました。

地区の女性たちが通りにもした夢灯りに導かれて駅前から大勢がやってきました。暗闇の中で池の周りの夢灯りが水面に映えて幻想的な世界となり、人々の顔は世界遺産になった喜びで輝き、満ち溢れていた夜でした。

一七年春には中尊寺通り上の二つの踏切が拡幅され、路面は滑りにくい材質、レールの間は自転車等の車輪が落ちこまないような仕様となりました。JRの意向もあり諦めていただけに完成した時は万感胸に迫る思いでした。

二十一年十二月、十一区駅前に「泉屋公園」、十二区に「上坊小公園」が完成。震災前に十三区にできていた「館前小公園」と、三つの公園が揃いました。検討時の大きな課題だったトイレもオストメイト（人工肛門保有者）対応も加えて設置され、無事解決となりました。観光客のみならず地元の方たちもベンチでゆったりと楽しそうにおしゃべりしている姿も時折見かけます。

また、私たちは景観上の理由から電線地中化（無電柱化）を要望しましたが、年々激化する異常気象での電柱倒壊が電気や交通機関などのインフラを脅かすことも視野に入れる必要があると思います。^{*}一三年、国土交通省の調べによると日本の無電柱化率は欧米、アジアの主要都市と比べて雲泥の差があるそうです。

心弾む話題があります。「館前小公園」の近くに新しくカフェが開店しており、「上坊小公園」近くでも三月に別の方がカフェを本格オープンするそうです。ここはかつて空き家購入後純和風の外観にして、郷土料理の「はっと」をメインとして通りの活性化に一役買っていただいたお休み処でした。また活用されることになり新たな賑わいが生まれる

ことでしよう。

この通りにも新しい風が吹き始めました。

たくさんの方の応援と、住んでいる方々の意見を集約してきた全長一・四kmの中尊寺通りに、通りの皆さん方もとても満足しているようです。岩手県も、私たちが望む以上のことをやってくださったことに深く感謝しております。

早くに整備していた毛越寺通りは町の主要施設が多いことで多くの方が通ります。でも、中尊寺通りには足が向かないと言う方もいらつしやいますが、ぜひ通ってみてください。時間が許せば暗くなってからも、灯りを見に――。

^{*} 日本の無電柱化率は世界からかなり遅れています。一三年国土交通省の調べによるとロンドン、パリ、香港は一〇〇%、ベルリン、台北が九十%台、東京二十三区は七%、大阪府五%、日本平均では一%とのことでした。

えんどろ せつこ



電線地中化前



電線地中化後

園児との謡教室

花咲かば

鈴木 四郎

私たち平泉喜校会は、伝統文化の継承から平泉町立幼稚園・保育所に謡教室の企画を申入れましたところ快諾され、謡教室の故山田順作氏によってスタート致しましたが、平成二十年のことでした。

そして三年後に、私が順作氏の後を引き継ぐことになりました。「演目は小謡二番で、三十分間だから頼むよ！教え方は自分なりにやっつていいから」と。

初めは戸惑いを感じ、発声・正座・所作（行儀や扇の持ち方）など、新米教士には不安がつぎきました。

演目は、義経が幼名紗那王の【鞍馬天狗】の詞章から「花咲かば 告げんといひいし山里の〜…」と、一曲が謡えるまで続けて声を出す。もう一番、詩歌・書道に長じた菅



中尊寺 白山社能楽堂で堂々と

原道真に因む【老松】です。長寿と泰平を寿ぎ、慶祝の席で謡われることが多く、節回しは難しいかと思いつつも「鶴亀の〜 齢を授くる…」の一節。これも園児みんなイッショウケンメイで越えることが出来ました。

先ず、担任の先生に模造紙に曲名と詞章をひらがなで大きく書いてもらい、一字ずつ読上げて、一小節のオーム返しを繰り返します。現在は椅子生活が日常で正座は苦手な児も多く、足の親指どうしを重ねての正座に十分程取組み、五〜六分の休憩で足の運動をやり、気分を変えながらの稽古です。七月に入り、鞍馬天狗を通して謡えた頃合いに、扇は右手に持ち姿勢を正す道具として教え、顎は動かさず前を見て、正座も崩さず。詞章が身につくようになったのは、幼稚園の先生方と保育所の先生方の熱心な指導がとても大きかったと、感謝しております。

能楽は、平成十三年（二〇〇一年）にはユネスコの世界文化遺産に登録されており、平泉の白山神社能舞台は嘉永二年（一八四九年ペリー来航の年）に中尊寺により再建された国内でも由緒ある野外能舞台です。

謡教室での稽古は園児たちの元気な声と所作（お行儀）を中心に喋りや余所見をしないこと、挨拶もちゃんとできる児に心を掛けております。

園児たちは謡装束の着物や袴姿での発表は、平泉町の芸術文化祭のオープニングを果たし、沢山の拍手をもらって大満足でした。そして、観客の多い秋の藤原祭りの能舞台では緊張しつつも堂々と謡えて、きつと、能舞台の上から見た景色は胸に残ることでしょう。

初めて謡で付き合った当時の園児たちも、令和七年の正月には成人を迎えられます。私にとっても大きな喜びです。将来、この子供が同級会の慶祝謡に【老松】が唱和される日を夢見て、微力ながら今後も指導精進致したく思っております。

ご指導を賜った喜多流能楽師の佐々木多門先生、日頃から温かく見守っていただいている白山神社様、中尊寺様、平泉町内の皆さんに御礼申し上げます。

（平泉喜校会員）

〔関山句囊〕

（令和六年六月二十九日 於毛越寺）

〈第六十三回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（當日句入選）

祈りの日礎石に遊ぶ梅雨の蝶 （大会長賞）

*対馬康子選 特選 一関市 村上 達男

遣水に迦陵頻伽やあやめ寺 （毛越寺賞主賞）

特選 平泉町 岩淵眞理子

萬のあやめ萬の言葉を揺らしおり （中尊寺賞首賞）

特選 越谷市 田中 朋子

梅雨の蝶児童合唱澄み渡り

秀逸 平泉町 佐々木邦世

浄土にもあくたのありて花あやめ

秀逸 盛岡市 伊藤 恵美

平泉の日大さ山小さき山

秀逸 盛岡市 佐藤ひこあき

あやめ生ふ三千界の一隅に

秀逸 盛岡市 兼平 玲子

義経を護りきらざる関の夏

秀逸 江東区 五十里順三

千年の杉に抱きつく蝉の殻 （岩手県知事賞）

*白濱一羊選 特選 奥州市 石田 裕子

あやめ園を丸ごと欲しくなりにけり （河北新報社賞）

特選 奥州市 羽藤 焼石

平安の礎石を巡る蟻の列 （岩手日報社賞）

特選 盛岡市 兼平 玲子

遣り水の水のささめき薄暑光

秀逸 盛岡市 北浦 詔子

旅人も投句してをりあやめ寺

秀逸 盛岡市 沼里 恵美

声明と鉦ひびきあふ堂涼し

秀逸 奥州市 古川 和子

瑠璃色の数珠もて祈る平泉の日

秀逸 奥州市 小野寺敦子

あやめ摘む花いっぱいの一輪車

秀逸 盛岡市 工藤 幸子

供養会の鐘の余韻や堂涼し

（岩手県議会議長賞）

*小畑柚流選 特選 北上市 伊藤 順子

風呼びて万の笑顔や花あやめ （岩手日報社賞）

特選 一関市 稲玉 宇平

浄土へのさ迷ふ道か古代蓮 （中尊寺賞）

特選 一関市 石川 恵子

夢の跡ちらりと見せる古代蓮

秀逸 奥州市 青沼 利秋

振花や池を渡りて弥陀の風

秀逸 一関市 小岩 秀利

神杉に大きな洞や蟬の殻

秀逸 盛岡市 相馬 定子

余韻^{ていようしやう}々^{ていようしやう}平泉の日の祈り （平泉町教育長賞）

*小林輝子選 特選 大崎市 佐々木克狼歎

走り根と紛ふ浄土の青大将 （岩手日日新聞社賞）

特選 一関市 森 正江

あやめ園花がらつみの猫車 （毛越寺賞）

特選 一関市 小西 花乃

茗荷の子十八坊の門口に

秀逸 奥州市 小野寺昭次

夏草の長けてや判官妻子墓

秀逸 大崎市 木村 一枝

丹の寺をけふ^{さくら}煌めかす梅雨の蝶

秀逸 奥州市 齊藤 瑞子

光背に平安あやめ毛越寺

秀逸 奥州市 阿部 靖

濁世とて余さず映し浄土池

（平泉町議会議長賞）

*渡辺誠一郎選 特選 気仙沼市 石川喜美子

万緑を負ふ丹の寺の礎石かな （岩手日報社賞）

特選 奥州市 古川 和子

梅雨に入る経文に無き句読点 （岩手日日新聞社賞）

特選 奥州市 郡司 山吹

仏の手借りて降りたる蜘蛛の糸

秀逸 一関市 澤野 凜子

世界遺産の池を自在に目高の列

秀逸 盛岡市 木関 偕楽

光堂のひかりを集め風光る

秀逸 板橋区 岡崎 久子

(応募句入選)

(投句総数 八三四句)

古代蓮勾玉の風はらみ咲く

(平泉観光協会長賞)

*照井 翠選

特選 奥州市 沼倉 規子

旅人に風の触れ行くあやめかな

(河北新報社賞)

特選

一関市 三浦ことぶき

まなうらに十二単ひとえの夏の蝶

(岩手日日新聞社賞)

特選

板橋区 岡崎 久子

三衡の一念燃やす古代蓮

秀逸

大崎市 鹿野 孝子

草刈の鐘楼跡に一服す

秀逸

盛岡市 和田 タケ

一切経金字銀字の涼しさよ

秀逸

盛岡市 村井 康典

天 平泉の日兵士眠れる土句ふ

地 瓦礫灼け地図が頼りにならぬ街

人 清衡の大地をけづる雪解川

奥州市 小野寺敦子

北秋田市 五代儀幹雄

平泉町 岩渕 洋子

*白濱一羊選

天 青嵐いま鞘堂の闇動く

奥州市 鎌倉 道彦

地 百枚の皿洗ひ切る薄暑かな

盛岡市 佐藤 茂之

人 日輪から放たれて春スキーヤー

盛岡市 及川 永心

*小畑柚流選

天 現世と浄土をつなぐ古代蓮

盛岡市 中野 忠志

地 老松は神の依代よりしろ新能

気仙沼市 石川喜美子

人 千年の紫いまにいぬふぐり

大船渡市 白木澤妙順

*渡辺誠一郎選

天 田水張る浄土の夢をなみなみと

一関市 佐藤 光枝

地 能登の塩ひとつまみ足し浅蜷汁

一関市 吉田江美子

人 悪路王の亡びの郷の田植かな

奥州市 小野寺昭次

*小林輝子選

天 十返りの花や開山九百年

一関市 稲玉 宇平

地 出開帳の東京の空国訛

一関市 三浦 寿子

人 まみえたき紅さす佛蓮の花

盛岡市 菊地 節子

*照井 翠選

天 ひとひらに万の花みるおうな媼かな

大船渡市 白木澤妙順

地 耕の噛みしむる齒のありにけり

一関市 伊東 静枝

人 どの顔も直しの利かぬ夏野かな

一関市 鈴木道紫葉

岩手県内 小・中学校の部（投句総数 一、二六〇句）

岩手県内小学校

特選（三句）

*……ユネスコ協会会長賞

* ねこのひげ春の香りを察知する

一関市萩荘小学校 五年 柳澤 依美

あと少しブザービーター春の音

一関市萩荘小学校 五年 菊地 湊翔

小黑号青葉の丘で駆けまわる

遠野市小友小学校 五年 小松 太陽

岩手県内中学校

特選（三句）

* 夏休み白紙のままの最終日

矢巾町矢巾中学校 一年 上女鹿朱奏

覚悟決め一歩踏み出す入学式

宮古市新里中学校 一年 古館 吏玖

新緑の奥に眠りし金色堂

矢巾町矢巾中学校 三年 小平 朱莉

平泉小学校

特選（三句）

* 桜ちる今年最後のランドセル

六年 瀧澤 昊平

桜舞い道を彩る月見坂

六年 佐々木颯翔

春の風輝く音色マーチング

六年 小野寺夏帆

長島小学校

特選（三句）

* みつけたぞカナヘビにんじや草の中

三年 山崎 燈真

ヒーローだブランコとめたおにいさん

一年 山田 蒼太

中尊寺夕日顔出す月見坂

六年 岩渕 未来

平泉中学校

特選（三句）

* バトンパス夏空の下繋ぐ道

三年 佐藤壮智耀

こんにちは春爛漫の蒼き日よ

三年 佐藤 詩恵

風ひかり希望に満ちる我がこころ

三年 葛西 瑠海

第六十四回 平泉芭蕉俳句大会

令和七年六月二十九日（日）

会場 中尊寺

特別選者 白濱 一羊 先生

（「樹氷」主宰

岩手県俳人協会会長）

〔関山歌籠〕

(令和六年四月二十六日)

〈第四十四回西行祭短歌大会〉

*東 直子選

老いるとはすなわち孤立することか凍える胸
に白熊が棲む (中尊寺貫首賞)

奥州 佐藤美津子

降りしきる雪の匂ひを纏ふ子は息を弾ませ図
書館に来る (平泉町長賞)

宮城県 片山佐依子

戸毎戸毎の名字唱えて過ぎゆけり新旧郵便配
達のひと (平泉観光協会長賞)

東京都 森田小夜子

今宵雲は低くあるらし漁りするエンジンの音
高く響交う 山口県 山縣満里子

もろごゑがさぎなみのごと響きつついづこ行
きけむ夕暮れの鳥 一関 一條さち子

鬼灯のすがれし夢の中に見ゆ形とどめぬ赤い
たいたし 花巻 岡田 憲子

雪かきを終えて楽しんでむ黒砂糖波照間島は二十
度と聞く 新潟県 柳村 光寛

今はまだアリスの国に行けなくて息継ぎ下手
な海底の魚 神奈川県 西田 美鈴

春の雪降り来る車窓に見る表示「ここから津
波浸水区間」 一関 松村 雅子

傷つきし小さき獣のごと眠る少年朝より保健
室にて (岩手日報社賞)

青森県 中里茉莉子

画鋏は紙の切れ端押し潰し角の掲示板ガラン
と二月 (IBC岩手放送賞)

山田 仲田 良

生まれ来て初にこの世の映る目に涙をためて
新生児泣く (岩手日日新聞社賞)

和歌山県 松田 容典

佳作

縦書きは左に曲がる人だった 帰りはどこか
へ寄る人だった 宮城県 後藤 善之

十円玉かがみて拾ふわれの目と同じ眼線で笑
みゐるをさな 宮城県 遠山 勝雄

第四十五回 平泉西行祭短歌大会

令和七年四月二十五日(金)

会場 中尊寺 光勝院

特別選者 穂村 弘 先生

(歌人、エッセイスト、翻訳家、
日経歌壇選者)

讚衡蔵特別展示 文化財調査中間報告

菅野 澄 円

金色堂建立九〇〇年という勝縁の年となった令和六年は、東京国立博物館での特別展にはじまり、同時に中尊寺山内でも記念の事業を行ってきた。ここでは文化財に関連した活動についてご報告する。

建立九百年特別展

「中尊寺金色堂」

東京国立博物館

令和六年一月二十三日～四月十四日

東京国立博物館で開催された金色堂展については、その開幕の様子を前号でお伝えしている。会期中は、連日入場待ちが発生するほどの盛況となり、関東だけでなく平泉を初め県内からも多くのお客様が観覧してくださった。その

おかげも有り総入場者数は二五二、六〇一人。これは二〇二三年十月～二〇二四年九月の一年間に開催された国内の特別展覧会の五位（一位から四位は、モネ展、マティス展の美術展）であった。

閉幕後、境内ですれ違うお客様から「東博で見た仏さまはどこですか？」「私は三回見に行きました。」などとお声がけいただくことがある。特別展をきっかけにより多くの方々に感心を寄せていただき、平泉へも足を運んでいただいた。

金色堂九〇〇年記念

「金銅華鬘全六面展示」

讚衡蔵

会期 八月一日～三十一日

所蔵品を各地の国立博物館に寄託することは、特異なことではなく、各館も所蔵品に寄託品を加えて常設展や企画展の組立をしている。盗難・火災・地震など、文化財を継承するには常にリスクがあり、全国に分散して保管することも対策の一つと考えられる。また、関東・関西の方々に、平

泉の文化財を知って頂くきっかけともなる。ただ、寄託を継続的・断続的におこなっている中で中尊寺に全ての文化財が揃うという時間がほとんど無いのも事実である。本年は金色堂建立九〇〇年を記念し金銅華鬘全六面を讚衡蔵で展示する機会を得た。一時還蔵・運搬と展示への御助言を頂いた奈良国立博物館・東京国立博物館に感謝申し上げます。夏休みの展示ということもあり、華鬘にちなんで迦陵頻伽を探す子供企画を同時開催したが、想定を上回る参加者で会期終了を待たずに配布物がなくなってしまう、後半に御参拝頂いた児童の皆さんには申し訳なく思っている。

金銅華鬘全六面調査

前述のような理由で、金銅華鬘全六面が揃った好機を利用して、九月専門家による調査を行った。調査研究者は、加島勝（大正大学）、清水健（東京国立博物館）、永井美由紀（美術史学会会員）、泉武夫（東北大学名誉教授）各先生。現在その調査結果をまとめて頂いているので、近くご報告できると思う。



金銅迦陵頻伽文華鬘

金色堂建立九百年特別展示

「中尊寺山内の古仏」

讚衡藏

前期 十月二日～十月十九日

釈迦如来及び両脇侍像（常住院）

大日如来坐像（瑠璃光院）

後期 十月三十日～十一月二十六日

釈迦如来及び両脇侍像（釈尊院）

大日如来坐像（大長寿院）

通期

丈六仏光背付属の化仏（中尊寺）

吉祥天立像※伝梵天立像（葉樹王院）

奥州藤原氏という大檀越を失い、鎌倉幕府から寺領安堵を約束されはしたものの、平泉の寺社がそれまでのような興隆を維持できないことは当然のことである。

鎌倉 室町 南北朝 戦国 江戸時代までの四百数十年の間には建武火災という大きな損失も有り、建物については金色堂と経蔵のみを残したというのが寺伝である。仏像

建武の火災は一山の堂塔を焼き尽くしたばかりでなく、多くの仏像・仏具、そして藤原氏時代の出来事を記していたであろう古文書類の多くも焼失させた。往時の中尊寺の姿が解明されない理由の一つでもある。

特別展示期間中は、かつて無いほど続いた猛暑からつかの間の秋の清々しさも手伝って、沢山のお客様に御参拝いただいた。常設展示に比べて滞在時間も長く、皆さんが熱心に解説を読み仏さまのお姿に魅入っている姿が印象に残った。

監修を頂いた浅井和春（青山学院大学名誉教授）先生、そして常住院・釈尊院の釈迦三尊像修理に携わられ、今回の移動・展示準備にも御協力をお願いした株式会社明古道（東京都世田谷区）様に深く感謝申し上げます。

や仏具は祀られるべき堂塔を失って、金色堂覆堂・経蔵・山内支院に保管されていた。建武の火災からの三百年余の間も荒廃は進んでいった。江戸時代の安定と仙台藩による保護は、失われつつあった仏像・仏具にも修復の機会が巡り、おそらく同時期に堂塔の再興も行われた。現代の我々が認識している境内の風景は江戸期に再整備されていた参道・堂塔を基礎にしている。

釈迦如来及び両脇侍像（常住院山王堂）、釈迦如来及び両脇侍像（釈尊院釈迦堂）の各像は近年保存修理が施され、その時の調査とともに江戸期～明治期に修理や補修がなされていることが確認された。

常住院山王堂は、比叡山日吉山王をお祀りするお堂である。一山の徒弟は得度（出家）の時、剃髪した髪を山王堂側の石塔に納める習わしである。日吉山王の本地仏である釈迦如来が安置される。

釈迦堂は、金色堂広場に以降として残る池跡の畔から、二階大堂があったと考えられる現能舞台や白山神社のある平場へ向かう道沿いにある。さらにその先には現在は林道としても使用していない道が衣川の泉ヶ城へ続いている。



釈迦如来及び両脇侍像

経蔵彩色調査

経蔵内部の木部に彩色の痕跡が残っている。金色堂昭和
大修理のおり、山崎昭二郎氏がこれを写し取り復元を試み
られた。原画は国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）に所
蔵されている。山崎昭二郎氏は兵庫県赤穂市のご出身で、
東京美術大学（現東京藝術大学）へ進学し古代文様の彩色
技法を習得した。その後は平等院鳳凰堂をはじめ醍醐寺五
重塔、中尊寺金色堂、唐招提寺、厳島神社など日本が誇る
名だたる歴史的建造物数多くの社寺建築で彩色文様の復元
や保存に従事された。五十二歳で文化庁より建造物彩色選
定保存技術保持者に全国で初めて認定。一九九三年に六十
六歳でお亡くなりになった。

仏教美術史の第一人者で中尊寺経の調査研究でもお世話
になっている泉武夫（東北大学名誉教授）、加島勝（大正
大学）、大島幸代（大正大学）各先生の協力を得て本年九
月に、現状調査および蛍光X線・赤外線撮影等の調査を行っ
た。山崎昭二郎氏は、復元模写のみならず、線画彩色の再
現に至った考察ものこして下さっていた。奈良京都での最
新の修復・復元の資料も参考としながら、研究を進めてい

ただいている。こちらにも近くご報告の機会を持ちたいと考
えている。

中尊寺本坊表門（重要文化財）解体修理

前述のように、江戸期の天下太平は中尊寺にも、復興・
修復の気運をもたらした。その中心となったのは仙台伊達
藩の庇護である。中尊寺本坊表門は、一関伊達藩藩邸から
移築したと伝わり、同時期の境内整備の一環であったと思
われる。当時の一関藩主伊達宗勝（政宗の十男）は、後に
いわゆる伊達騒動で処罰され土佐藩に永預の処分が下され
ている。伊達騒動は後に戯曲や小説の題材となり、宗勝が
悪者として描かれることが多い。一方で仙台藩二代忠宗以
降の時代では、中尊寺の復興を含めて一関藩領の治政に尽
力したことも事実である。

その表門は、屋根の葺き替えなどの記録はあるものの、
主要な柱・扉・金具などは江戸初期のままである。岩手・
宮城内陸地震、東日本大震災と度重なる大地震にも耐え、
世界遺産登録後も多くの参拝客を迎え入れてきたが、いよ
いよ解体修理に踏み切ることとなった。

今回は中尊寺として初めてクラウドファンディングも利
用し（詳細は裏表紙裏）、皆様の協力の下、令和八年の完
成を目指している。

中尊寺大伽藍落慶供養九百年（二〇二六）、清衡公九百
年御遠忌（二〇二七）と、中尊寺の九百年を記念する年が
続くが、奥州藤原氏滅亡からの八〇〇年以上の間、幾度も
の戦争、天災、人災に遭いながらも、その都度領主や地域
の方々に助けられてきたのが中尊寺の歴史である。今回ご
紹介した各事業に登場した仏具・仏像・荘厳具が、薄暗い
蔵の中で機縁の巡るまでじつと待っていた、そんな時間が
大半であったのかもしれない。これからも機を見て脚光を
浴びることの少ない歴史についてもご紹介・展示の機会を
増やしたいと考えている。

（管財部執事）



中尊寺本坊表門

関山植物誌〈15〉

ミヤコワスレ

参道の月見坂は小学校の帰り道、坂の途中には観光客もほとんど訪れない「大人の目の届かない」場所もあり、私はその一角を「秘密の場所」として定めていた。温暖な季節はしばしばそこに入り浸り、つい長い道草を食うことも多かった。とはいえ、何か特別なことをするわけでもなく、図書館で借りてきた本を読んだり、駄菓子で頬張ったり、道連れとシールの交換会をする程度のものである。高学年にもなつてくると、まっすぐに家に帰る気が起きず、頻繁に秘密の場所へ入り浸る日が続くこともあった。連日の遅い帰宅を心配した母が、「何か悪いことでもしているのでは？」と思ったこともあったらしいが、実際には一人

ポーツと静かな時間を楽しんでいることが多かった。

先日、久しぶりにあの懐かしき秘密の場所へ向かうことになった。ふと足元に目をやると、小さな花が咲いている。子どもの頃にも見かけたその花はミヤコワスレ。目の前のミヤコワスレ。控えめな紫色の花が、「やつと気づいてくれたの？」と言わんばかりに私を見上げている。「都忘れ……」独り言のように呟きながら、その小さな花をじつと見つめた。スマホもパソコンもないその場所で、ただ花を眺める時間は驚くほど静かで心地よかった。まるでミヤコワスレが、ほんのひとときだけ私を日常から連れ出してくれたようだった。心がふつと軽くなり、癒されている自分に気づいた。

ふと目を閉じると、子どもの頃の私が、同じ場所で花を見つめている情景が浮かんできた。そうか、あのときも私は学校や友達関係の重荷から解放されるために、この場所に足を運んでいたのかもしれない。まっすぐ家に帰ることができなかつた理由は、子供ながらに癒しを求めていたからだだったのだ。ミヤコワスレの花言葉は「しほしの憩い」。この花が持つ不思議な癒しの力は、時を超えて変わることなく、幼い私にも今の私にも、一瞬のやすらぎの時間を与えてくれている。



〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

東日本研修会に参加して

佐々木 博美

コロナ禍以来となる叡山講福聚教会東日本研修会が令和六年十月七日、八日の二日間にわたり、東京浅草の聖観音宗総本山浅草寺にて開催され、中尊寺支部から九名の会員が参加いたしました。

開講式のあとすぐに講義が始まり、各階級ごとに浅草寺内の会場に分かれ講義を受けました。一日目の講義終了後は浅草寺境内、浅草寺本坊の庭園を散策、普段は見ることでできない同寺に伝わる宝物や東京大空襲の被災を免れた伝法院を特別に拝観させていただきました。大変貴重な経験に感動いたしました。

二日目は九時より講義が始まり、第六講ですべての日程を終えました。その後浅草寺本堂で閉講式が執り行われ、各地方本部長様出仕のもと法楽が営まれました。参加者全員で和讃と詠歌を奉詠し、その後「伝教大師讃仰和讃」詠

舞が講師・助講師先生方により奉納されました。

厳かな雰囲気の中での舞の奉納に私たち参加者はもちろんのこと、参拝に訪れた観光客の方々も魅了されていたようでした。

今回の研修会では、講師の先生方のご指導が大変わかりやすく、細かな節回しや所作など丁寧に説明していただき、御詠歌の理解が一層深まり、大変有意義な時間を過ごすことができました。

今回の研修で学んだことを積極的に活用し、今後も自己成長に努めてまいりたいと思います。また、引き続きこのような研修の機会があれば、ぜひ参加したいと考えています。

この度の東日本研修会に参加する貴重な機会をいただき心より感謝いたします。

(福聚教会中尊寺支部幹事)

新刊紹介

(令和六年一月〜十二月)

〈書籍〉

『仏教儀礼の音曲とことば 中世の〈声〉を聴く』

発行所…法蔵館 著者…柴 佳世乃 二・二十八

『奥州藤原氏 その光と影』(シリーズ…読みなおす日本史)

発行所…吉川弘文館 著者…高橋 富雄 十二・二十九

『土門拳 日本古寺』

発行所…青艸堂 発行者…夏楠 著者…土門 拳 五・一

〈雑誌〉

『時空旅人2024年3月号 平泉 奥州藤原氏と仏国土の夢』

発行所…三栄 一・二十五



〈報告書〉

『岩手県平泉町文化財調査報告書第146集 平泉遺跡群発掘調査報告書』

〔祇園II遺跡第20次 国衡館跡第16次 伽羅之御所跡第31次 西光寺跡第14・15次

志羅山遺跡第120・121次 花立II遺跡第30次〕

編集・発行…平泉町教育委員会 三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第147集

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書V ―第14次調査―』

編集・発行…平泉町教育委員会 三・三十一

『岩手県文化財調査報告書第168集 平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡 ―第84次発掘調査概報―』

発行…岩手県教育委員会生涯学習文化財課 三・二十八

『平泉学研究年報 第4号』

発行…世界遺産平泉保存活用推進実行委員会

編集…岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・二十二

『平泉文化研究年報 第24号』

発行…岩手大学平泉文化研究センター・岩手県 三・二十六

『岩手大学平泉文化研究センター年報「第12集」』

編集・発行：岩手大学平泉文化研究センター 三・二十九

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

白山社及び駒形根神社・慈恵塚・山王窟』

発行・編集：一関市教育委員会 三・二十二

『令和5年度 骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

発行：一関市博物館 三・三十一

『一関市博物館研究報告 第27号』

編集・発行：一関市博物館 三・三十一

寒行と「無財の七施」

菅野 靖 純

修正会が終わり、二回目の寒行が始まりました。寒行とは小寒から寒の明け節分まで歩く修行であり、私たち行者は毎日午後五時から山を下り、平泉町内を巡ります。この際、持鈴を振りながら、所々で法螺貝を吹きつつ托鉢をしながら歩きます。この文章を書いている時点では昨年と同様に、雪が少ない日が続いています。これにより、道は歩きやすいのですが、時折降る雨により染み込む水によって、じわじわと体温を奪われることもあります。そんな中でも、行く先々で地域の皆さんから「お疲れ様です」「いつも寒行が始まると春が近づいているのだと感じます」といった温かい言葉を頂戴することがあります。皆さんが待っていて言葉をくれることが、寒行が今まで続いてきた大きな励ましになっているのではないかと思います。

さて、仏教では菩薩が悟りを得るために行う修行の一つに『六波羅蜜』というものがあります。六つの善行を指し、

その中の一つに『布施』があります。布施と聞くと、多くの方はご法事などのお布施をイメージされると思います。しかし、布施とは物質的なものだけでなく、知識や安心感を与えることも含まれます。『無財の七施』という教えでは、お金や物がなくても他人に喜びを与えることができる七つの方法が示されています。

- ① 眼 施…やさしい眼差しで人に接すること
- ② 和顔 施…にこやかな顔で接すること
- ③ 言辞 施…やさしい言葉で接すること
- ④ 身 施…自分の身体でできることで思いやりを示すこと（重い荷物を運んであげる等）
- ⑤ 心 施…他のために心をくばること。相手の立場や気持ちを考え、思いやりの心を持つこと
- ⑥ 床座 施…席や場所を譲ること
- ⑦ 房舎 施…相手の休まる場所を提供すること

寒行で皆さんが私たちに對して行ってくれていることは、まさにこれに近いのではないのでしょうか。鈴や法螺貝

の音を響かせながら町を巡ると、大人から子供まで皆さんは雨や雪であつても家の外に出てきて笑顔で言葉もくださいます。また、特に冷え込む日には、「寒いでしょう」とホッカイロなどを渡してくださる方もいました。これはまさに眼施、和顔施、言辞施、心施を実践していると感じます。これらに力を頂いて私たちは行を満行することができていると感じます。

ふと自分を振り返ると、檀家の皆様や参拝客の方々に對して、日頃どのように布施の心を持って接しているのかを考えさせられます。私自身、参拝客の坐禅体験をお手伝いすることがあります。初めて坐禅を行う方が多く、心身共に硬い様子が始まる方が多いのですが、少しずつ呼吸を整え、心を落ち着けていく姿を見ていると、私も初心に帰る思いがします。ある日、坐禅後に「こんなに心が落ち着いたのは久しぶりです」と感謝の言葉をいただきました。その時、布施とは大きなことだけでなく、こうした小さな行の積み重ねなのかもしれないと実感しました。

先日、無財の七施の一つ足して耳施（にせ）という考え方を知りました。これは耳による布施で、人の話・言葉に

僧侶としての日々

佐々木 祐 輔

みなさんは「お寺」や「お坊さん」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか。檀家さんのお葬儀でお経を唱える姿や、滝に打たれる修行、あるいはお坊さんという理由で食べられないものがあるといった印象を抱いている方も多いかもしれません。

私自身も、在家（一般家庭）に生まれ育った身ですから、僧侶になり中尊寺で働く以前は、みなさんと同じようなイメージを持っていました。しかし、実際にお寺に勤めて三年が経った今、そのイメージと現実の違いを日々感じています。どのような職業でも「想像と現実の違い」というものはありますが、今回は私が僧侶として経験したいくつかを紹介しようと思います。

まず、お葬儀について、中尊寺では、檀家さんのお葬儀を次のような流れで執り行います。

- ①枕経・入棺
- ②火葬
- ③お通夜
- ④葬儀・初七日法要

耳を傾け、真摯に聞くことだそうです。寒行中、私たち行者は挨拶以外ほとんど会話をしません。しかし、地域の方々の励ましの声や応援の言葉に耳を傾けることは、心に感謝の念を抱かせます。たとえ短い言葉であつても、それを聞くことで私たちは温かさや支えを感じ、修行を続ける力を得ています。

耳施は、ただ聞くだけでなく、心からその言葉を受け取ることも大切であると思います。忙しい日々の中で、誰かが真剣に耳を傾けるだけでも、その人は安心感を得ることができそうです。直接会話を交わすことが減った現代においても、誰かの声を聞き、心で応えることができるのです。

耳施の実践は、私たち自身の心を開く機会でもあります。相手の声に耳を傾け、その意図や気持ちを理解しようとする姿勢は、相手への深い思いやりをあらわします。寒行中に私たちが受け取る温かさと同じように、日々の中で他者に対して耳を傾けることを忘れずにいることが大切なのだと思います。

（瑠璃光院 法嗣）

お寺に勤める前、私がお葬儀に出席したのは幼少期に一度だけでした。その時の記憶といえば、お坊さんが木魚をポコポコと叩きながらお経を唱えていた姿と、待ち時間が長く、待ちきれなくて弟と外で遊んでいたことくらいです。しかし、僧侶として初めて檀家さんのお葬儀に参加した時、葬儀がたくさんの儀式の積み重ねによって成り立っていることを実感しました。塔婆や位牌、帷子、頭達袋など多くの準備が必要で、それらを迅速かつ丁寧に整えることが何よりも大切です。「子供の頃に感じた長い待ち時間は、この準備の丁寧さや念入りさの裏返しだったのだな」と、大人になり僧侶となった今、ようやくその儀式の意味を理解できました。

次に修行についてです。

みなさんが修行とイメージするのは、滝に打たれる「滝行」だと思えますが、ここまで私は滝行を行ったことがありません。天台宗の修行は様々ありますが、ひとまず僧侶になるために課されているいくつかの修行があります。まずは僧侶になることを決意したら、得度受戒を受けます。得度は仏様の前、あるいは式に駆け付けていただいた皆様の

前でこれから一人の僧侶とし生きていく決意を明らかにする重要な儀式です。そして得度を終えるとようやく比叡山に登り、比叡山横川の行院（修行道場）で二カ月修行します。最初の一月は前行と言われ、基本となるお経の読み方や儀式作法などについて教えていただきます。後の一月は四度加行、密教の修行で、毎日朝二時に起床、冷水を浴びて体を清めてからお堂に入り、護摩を焚きます。厳しいながらも仲間たちと一心不乱に修行に打ち込むことができる期間で、あつという間に過ぎてしまいます。行院での二か月間を過ごした後は、それぞれ期間は短いですが、入壇灌頂（灌頂の受者（弟子）になること）・開壇伝法（灌頂の阿闍梨（師匠）になる）・円頓大戒（天台宗僧侶が戒壇院で円頓菩薩戒を受戒する）・法華大会（法華十講の法要と、その後に夜まで行われる広学堅義の二つで構成されている）などの修行・儀式を受けます。

その後、皆さんも聞いたことがある、十二年籠山や千日回峰行などの修行を希望する者もいますが、ほぼすべての天台僧侶はここまでの道を履修・満行しそれぞれのお寺での僧侶としての日々が始まります。

御神事能番組

令和六年五月四日

法楽
古実式三番

開口 佐々木五大 大鼓 三浦 章興
祝詞 佐々木亮王 小鼓 菅野 靖純
若女 清水 秀法 笛 菅野 澄円
老女 破石 晋照 後見 菅原 光聴

半能 シテツレ 佐々木亮王 大鼓 千葉 快俊
竹生島 シテ 佐々木五大 小鼓 菅原 光聴
ワキ 佐々木秀厚 太鼓 三浦 章興
ワキツレ 菅野 靖純 笛 清水 秀法
ワキツレ 佐々木祐輔

最後に食事についてです。皆さんが普段口にするお米や野菜、肉、魚などを私たち僧侶もいただいています。しかし、法要や行事の際などには精進料理をいただきます。精進料理とは、お寺の中で重要視され、肉や魚、野菜の中でも「葱・ニラ・ニンニク・玉葱・ラッキョウ」などを使わない料理のことです。植物性の食材だけで、主に野菜、大豆製品、穀物などを使用し、素材の自然な風味です。食材への感謝を大切にする食文化で、現代では健康を意識する人々にも注目されています。

僧侶として過ごしてきた数年間のなかで、私は「想像と現実の違い」を何度も実感してきました。お寺での葬儀や修行、精進料理を通じて学んだのは、物事を表面的なイメージだけで判断せず、実際に体験してみることの大切さです。私の僧侶としての道は、まだ始まったばかりです。日々の精進を怠らず、見聞を広げ、これからは新たな知識を得ることで、皆さんにも仏教やお寺の素晴らしさを伝えていきたいらと思っています。

（積善院 法嗣）

秋の藤原まつり中尊寺能 十一月三日

連吟 平泉 二葉きらり園 園児二十一名
鞍馬天狗
老松
仕舞 一関喜桜会
松風 佐々木典子
浮船 千葉万美子
素謡 一関喜桜会
安宅

半能 シテツレ 佐々木亮王 大鼓 菅野 宏紹
秀衡 シテ 佐々木五大 太鼓 佐々木宥司
ワキツレ 菅野 靖純 小鼓 菅原 光聴
ワキツレ 佐々木祐輔 笛 清水 秀法

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

令和五年十二月一日～令和六年十一月三十日

□ 令和五年

十二月四日

於天台宗務庁

天台宗人権啓発公開講座

委員 三浦 章興

十二月七日

於天台宗務庁

教区実務担当者会議

円教院 千葉 快俊

□ 令和六年

二月二十二日～二十四日

於福岡市内

令和五年度教師研修会B群

円教院 千葉 快俊

五月二十三日～二十四日

於福島市内

布教師会東北・北海道地区協議会 総会・研修会

瑠璃光院 菅野 康純

利生院 菅野 宏紹

七月十一日

於天台宗務庁

天台宗人権啓発委員会

委員 三浦 章興

七月二十六日

於中尊寺光勝院

一隅を照らす運動陸奥教区本部研修会

山内より十二名参加

七月二十八日～八月二日

於比叡山延暦寺

総本山駐在布教

瑠璃光院 菅野 康純

七月三十一日～八月二日

於比叡山延暦寺

第五十九回天台宗青少年比叡山の集い

引率 破石 晋照

八月四日

於比叡山延暦寺

比叡山宗教サミット三十七周年「世界平和の祈り」

瑠璃光院 菅野 康純

十月二十六日

於中尊寺光勝院

一隅を照らす運動陸奥教区本部托鉢会

山内より三名参加

十一月十一日～十二日

於天台宗務庁

天台宗中央布教師研修会

瑠璃光院 菅野 康純

十一月十一日～十三日

於仙台市内

令和六年度教師研修会B群

瑠璃光院(嗣) 菅野 靖純

積善院(嗣) 佐々木祐輔

□ 教師補任

(令和六年四月二十一日)

権僧正

法泉院

三浦 章興

権僧正

円教院

千葉 快俊

□ 役職任免

(令和六年四月一日)

布教委員会委員

瑠璃光院

菅野 康純

(令和六年五月一日)

天台宗国際平和宗教協力協会専門委員

金剛院(副)

破石 晋照

□ 兼務住職任命

(令和六年四月四日)

寶性院兼務住職

菅野 康純

(令和六年七月四日)

金色院兼務住職

奥山 元照

□ 褒賞

(令和五年六月一日)

住職三十年勤続

葉樹王院

北嶺 澄照

御奉納者 御芳名

令和六年十一月二十四日

鈴木友子様

- 一、織部水指 飛井隆司作 一点
- 一、志野筒茶盤 佐藤重造作 一点
- 一、風炉先屏風 元沢柏雪書 一点



浄財御奉納者 御芳名

令和五年十二月、令和六年十一月

- 一関信用金庫平泉支店 支店長 藤森伸也様 三万円
- (有)平泉観光写真社 代表取締役 高橋拓生様 五万円
- 天台宗陸奥教区寺庭婦人会様 三万円
- (株)空知音ハーモニイ様 三万円
- 念法真教 総本山 金剛寺様 五万円
- 最勝寺様 十五万円
- 埼玉教区研修所研修会様 十万円
- 天台宗様 五万円
- 金色の風栽培研究会様 五万円
- 浄願寺様 三万円
- 西福寺様 十三万円
- 西福寺世話人一同様 十五万円
- 光明院 田代弘興様 三万円
- NPO法人VYS YOGI マスター・スグカー様 十万円
- 川口昭八郎様 二十万円
- 新渡戸明様 三万円
- 茨城県曹洞宗青年会様 三万円

浄土宗教誨師会様

十八万円

浄土宗務総長 川中光教様

三万円

浄土宗岩手教区教務所様

五万円

武蔵一宮 氷川神社氏子青年会様

三万円

毛越寺様

三万円

菊池國雄様

五万円

松下幸之助経営塾同志会様

五万円

川崎大師 平間寺様

三万円

(株)東北銀行 地域貢献寄付金

二十万円

川嶋印刷(株)様

十万円

茶道裏千家

十万円

淡交会岩手南支部様

六万円

志村宗光様

六万円

中田宗倫様

三万円

(有)千葉恵製菓 代表取締役

十万円

千葉正利様

十万円

天台県訪問団様

六万円

蓮華寺 紺野元嗣様

三万円

大圓寺様

十万円

金色の風栽培研究会様

五万円

(順不同)

浄財募金

- 令和六年能登半島地震災害義援金 一、〇七五、八六七円
- 令和六年能登半島地震災害義援金 一、二七六、四二九円
- 令和六年能登半島地震災害義援金 一、〇八七、五〇二円
- 二〇二四年台湾東部沖地震救援金 一、〇〇七、一八七円
- 二〇二四年台湾東部沖地震救援金 一、一八二、二二二円
- 令和六年能登半島地震災害義援金 二、二五三、七七三円
- 令和六年能登半島地震災害義援金 三、九三二、二一六円

不動尊篤信御奉納者 御芳名

令和五年十二月〜令和六年十一月

平泉町	川嶋印刷(株) 代表取締役社長 菊地慶高様	十三万円	銚子市	(株)イクオリティー 石毛裕之様	三万円
中野区	中村武司様	十一万五千円	銚子市	石毛裕之様	三万円
奥州市	(株)板宮建設 代表取締役社長 板宮一善様	十一万円	仙台市	(株)橋場総設 泉 笑子様	三万円
青森市	佐々木幸子様	十万二千円	平泉町	一関信用金庫 平泉支店様	三万円
一関市	(有)豊隆軌道 千葉幸八様	六万円	仙台市	貝和顕彦様	三万円
秋田市	木村英夫様	五万二千円	栗原市	(有)金成工務店様	三万円
一関市	大和建工(株) 千葉哲也様	五万円	川越市	小出明子様	三万円
大崎市	稲辺 勝様	四万五千円	奥州市	佐々木誠様	三万円
平泉町	(株)北都高速運輸倉庫東北 小野寺勝彦様	四万円	塩竈市	佐藤博圭様	三万円
一関市	小野寺清一様	四万円	一関市	山平様	三万円
一関市	佐藤貴理様	四万円	一関市	割烹 炬ばた一八 渋谷正幸様	三万円
栗原市	澤邊幸隆様	四万円	塩釜市	庄内千恵様	三万円
平泉町	(株)フタバ平泉 新賓泰生様	四万円	神奈川県 足柄下郡	白峰水蓮様	三万円
一関市	橋本友厚様	四万円	相模原市	菅原 亮様	三万円
千葉市	渡邊良弘様	四万円	名取市	(株)Our Voice様	三万円
新宿区	(有)シー・エヌ・エス 中村武司様	三万五千円	大田区	鈴木敏弘様	三万円
真岡市	(株)丸茂様	三万円	仙台市	宮城県仙台第二高等学校 高橋 賢様	三万円
			一関市	(有)豊隆軌道 千葉美樹様	三万円
			一関市	東北建工企業(株) 今野幸宏様	三万円

一関市	(株)東北鉄興社 佐野 聡様	三万円	一関市	(株)精茶百年本舗様	衡年茶
一関市	(株)アーク 橋本晋栄様	三万円	高崎市	大門屋物産(株)様	金色ダルマ (順不同)
一関市	橋本晋栄様	三万円			
墨田区	村上秀行様	三万円			
本吉郡	山口 昇様	三万円			
黒石市	池田陸奥男様	季每御供物			
黒石市	(株)池田不動産 池田裕章様	季每御供物			
青森県 三戸郡	(有)工銀青果 工藤一男様	季每御供物			
平川市	長尾智子様	季每御供物			
二戸市	(有)岩食商事 米沢 修様	季每御供物			
大仙市	(有)ベル美容室 高橋紀美世様	季每御供物			
金ヶ崎町	高橋勘太郎様	季每御供物			
きたま市	細渕ます美様	季每御供物			
水戸市	つくし 藤枝恵枝子様	季每御供物			
大館市	北秋生コン(株) 加賀谷正子様	季每御供物			
小樽市	村口初男様	季每御供物			
三沢市	大坂明美様	季每御供物			
青森市	佐々木幸子様	季每御供物			
弘前市	鎌田照美様	季每御供物			

執務日誌抄

令和五年十二月一日（令和六年十一月三十日）

令和五年

◇十二月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 六日 初詣警備会議（管財 於役場）
- 七日 台湾誘客活動（十一日、参拝 晋照）
- 薬師会 讃衡威）
- 九日 骨寺村莊園米奉納
- 十一日 平泉観光協会理事會（執事長）
- 十四日 弥陀会（讃衡威）
- 秋期定例一山会議
- 十七日 お経を読む会（利生院）
- 白山会（本堂）

◇二月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 二日 令和六年平泉信友会講演会（執事長 於泉橋庵）
- 三日 恒例大節分会（関取北勝富士関・歳男歳女・町内園児）
- 五日 平泉岩銀友の会新春講演会（参拝晋照 於武蔵坊）
- 六日 古都ひらいずみガイドの会講演会（執事長 於エビカ）
- 十四日 涅槃会御速夜（本堂）
- 十五日 涅槃会（本堂）
- お経を読む会（積善院）
- 十七日 「一関いわい・気仙地区」交流会（執事長 於新宿サンパークビル）
- 北勝富士関（八角部屋）結婚披露宴（法務章典 於ザ・プリンスパークタワー東京）

- 十九日 中尊寺節分講中総会（執事長、法務 於泉橋庵）
- 二十四日 文殊会（経蔵）
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼

令和六年

◇一月

- 一日 零時 新年祈祷護摩供修行
- 七時半 東山町（若水送り）着
- 九時 正月祈祷護摩（本堂）
- 十時半 総礼
- 修正会 釈迦供（本堂）
- 二日 九時 正月祈祷護摩（本堂）
- 修正会 薬師供（峯薬師 讃衡威）
- 午後三時 謡初め（庫裡広間）
- 三日 九時 正月祈祷護摩（本堂）
- 修正会 山王供（本堂）
- 十一時半 元三会 慈恵供（本堂）
- 四日 修正会 熊野供（琉璃光院薬師堂）
- 五日 修正会 文殊供（経蔵）

- 十九日 平泉観光協会理事會（執事長）
- 浄土宗教誨師会池田様来山
- 二十二日 平泉観光協会通常総会（参拝 晋照代理出席 於エビカ）
- 二十三日 山内大長寿院菅原美智子様逝去

◇三月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 七日 金色堂蛍光X線調査（加島勝先生ほか）
- 八日 中尊寺菊まつり協賛会役員会（光勝院）
- 十一日 東日本大震災慰霊法要（貫首ほか 於陸前高田市小友地蔵尊）
- 東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要（本堂）
- 十三日 JA「金色の風」豊作祈願法要（本堂）
- 十八日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会（執事長 於平泉文化遺産センター）

- 大般若会（利生院弁財天堂）
- 寒修行（行者三名、町内托鉢。節分）
- 六日 修正会 釈迦供・月山御法楽（釈迦堂）
- 七日 修正会 白山十一面供（本堂）
- 大般若会（本堂）
- 修正会 弥陀供（金色堂）
- 役席 春の能番組を語る
- 修正会 薬師供（讃衡威）
- 一字金輪仏・千手観音法楽
- 修正会結願
- 金盃披き（光勝院）
- 十四日 慈覚会（御影供 本堂）
- お経を読む会（貫首）
- 十八日 福聚教会中尊寺支部交流会（貫首・随行亮王 於泉橋庵）
- 二十三日 特別展「建立九〇〇年中尊寺金色堂」開催（四月十四日 於東京国立博物館）
- 二十八日 文化財防火訓練
- 二十九日 平泉商工会会員新年交流会

- 十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂）
- お経を読む会（観音院）
- 二十日 春彼岸会法要（法華三昧 本堂）
- 二十一日 金色堂孔雀蛍光X線調査
- 二十三日 源義経公東下り行列保存会定期総会（総務五大 於滝沢魚店）
- 二十四日 開山会（護摩供 開山堂）
- 春期定例一山会議
- 二十八日 平泉町観光審議会（参拝晋照代理出席 於役場）

◇四月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 四日 御修法「七佛薬師大法」（十日、貫首 於延暦寺）
- 六日 天台陸奥教区仏教青年会総会（法務章典 於毛越寺）
- 八日 仏生会（本堂）
- お経を読む会（金剛院）
- 福聚教会中尊寺支部定例総会（光勝院）
- 十二日 平泉観光協会理事會（執事長）

平泉観光協会推進実行委員
会総会(執事長 於役場)

十三日 中尊寺檀徒総代・世話人会
総会(執事長、法務ほか 於武蔵坊)

十四日 特別展「建立九〇〇年中尊寺
金色堂」閉幕・撥遣法要(於
東京国立博物館)

十五日 平泉をきれいにする会総会
(管財有司 於役場)

十六日 春の藤原まつり交通警備会
議(管財 於役場)

二十日 天台宗陸奥教区寺院婦人会
定例総会(執事長 光勝院)

二十五日 西福寺世話人会様団参
第四十四回西行祭短歌大会(講
師東直子氏「命を想う歌の今昔」
真言宗豊山派光明院様団参
二十九日

郷土芸能奉演(江刺 行山流角
懸鹿躍)

二日 開山護摩供(開山堂)
讚衡威運管委員会
郷土芸能奉演(栗原 栗原神楽)
春の藤原まつり「源義経公
東下り行列」歓迎レセプ
ション(貫首・執事長 於武蔵坊)

三日 源義経公東下り行列(義経公
役 俳優 寺田心)
郷土芸能奉演(衣川 川西念佛
劍舞)

四日 古実式三番
半能「竹生鳥」
友和会神輿渡御

五日 古実式三番「開口」
半能「田村」
郷土芸能奉演(平泉 達谷窟毘
沙門神楽)

六日 山王講(山王堂)

七日 平泉町世界遺産推進協議会
役員会(執事長 於平泉文化遺産

センター)

十日 旬の山菜を味わう会(貫首・執
事長 於岩沢羽山ふれあいセンター)

十八日 第二十六回仙台青葉能(於仙台
電力ホール)
富岡八幡宮司様来山(執事
長挨拶)

十九日 お経を読む会(円乗ノ五大)

二十一日 奉納ヨガ(VYS YOGI 光
勝院)

二十二日 令和六年度平泉町世界遺産
推進協議会総会(管財澄円 於
平泉世界遺産ガイダンスセンター)

二十三日 平泉商工会通常総会(執事長
於エビカ)

二十六日 第三十四回毛越寺「曲水の宴」
(貫首・執事長・随行亮王)

二十七日 平泉芭蕉祭全国俳句大会実
行委員会総会(執事長 於役場)

中尊寺菊まつり協賛会総会

二十九日 四寺廻廊総会(総務五大・亮王・
法務秀法 於瑞巖寺)

ウエーサカ仏教会総会(法務
章興 於一閑松竹)

三十日 平泉観光推進実行委員会
トップキヤラバン(三十一
日、執事長 於東京)

◇六月

一日 月次大般若(本堂)

四日 伝教会(御影供 本堂)

五日 曹洞宗茨城県青年会様団参
(総務五大挨拶)

八日 法華経頓写経会(光勝院)

十三日 四寺廻廊法要(貫首他 於立石寺)

十五日 令和六年度ふるさと平泉会総
会(執事長 於東天紅)

酒田三十六人衆上林英樹様
来山(総務五大挨拶)

十八日 一閑警察官友の会総会(執事
長 於武蔵坊)

十九日 社会を明るくする運動平泉
推進委員会(執事長 於役場)

二十日 ウエーサカの日勤行(法務

光勝院)

自在房蓮光忌法要(本堂)

二十六日 浄土宗開宗八五〇年慶讃
「阿波介追善法要・記念講
演会」(光勝院)

二十七日 貫首 講話(浄土宗教師会研
修会 於ベリーノホテル二閑)

二十八日 平泉世界遺産の日平和の祈
り(貫首ほか 於金色堂前)

二十九日 第六十三回平泉芭蕉祭全国俳
句大会(於毛越寺)
講師・特別選者 対馬康子氏

◇七月

一日 月次大般若(本堂)

四日 平泉観光協会理事会(執事長)

五日 平泉・一閑DMO事業報告
会(総務五大 於ホテル松の薫)

八日 氷川神社氏子青年会様団参

十二日 北上川リバーカルチャーアソ
シエーション総会(参拝普照)

水かけ神輿宵宮祭(総務五大

於観自在王院跡)

富岡八幡宮神輿総代連合会
歓迎交流会(執事長 於武蔵坊)

十四日 平泉総社神輿渡御
お経を読む会(釈尊院)

十六日 長滝白山神社様団参

十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)

西福寺檀信徒様団参(貫首案内)

十八日 平泉信友会総会(総務五大 於
武蔵坊)

二十日 「青空説法」(円乗院・執事長同行
於和賀多門院伊澤家)

平泉水かけ神輿神酒開き(総
務五大 於泉橋庵)

二十二日 千葉勇夫氏瑞宝单光章叙勲
受賞祝賀会(管財澄円 於平泉
レストハウス)

二十二日 大文字送り火警備会議(管財
於役場)

二十六日 一隅陸奥本部研修会(光勝院)

二十八日 バリ舞踊奉納(本堂)

二十九日 桜友会清掃奉仕(開山堂周辺)

◇八月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 四日 午後三時半 〈平和の鐘〉打鐘
- 七日 夏堂籠り(十一日、結衆、開山堂)
- 十四日 第四十五回中尊寺新能
狂言「横座」
能 「氷室」
- 十六日 第六十回平泉大文字送り火
- 二十日 毛越寺施餓鬼会(利生院)
奉納演奏(玉川学園オーケストラ部 本堂)
- 金色堂建立九百年慶讃法要
(本堂・金色堂)
- 二十二日 戸津説法聴聞(東伏見慈晃師) 貫首 於大津市東南寺
- 二十三日 施餓鬼会御速夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
- 二十五日 蜂神社例大祭(総務五大 於紫波町同神社)

- 二日 企画展示「山内の古仏展」前期(十月二十九日、讚衡蔵)
教育旅行誘致説明会(三日、総務五大 於名古屋)
- 慈眼会(本堂)
- 六日 中尊寺通りホコ天まつり開会式(参拝普照 於中尊寺通り)
- 七日 中尊寺菊まつり協賛会役員会(光勝院広間)
- 八日 天王寺区仏教会様団参
- 十一日 天台宗陸奥教区仏教青年会
研修会(光勝院)
第三十回平泉町社会福祉大会(貫首 於エビカ)
- 十六日 山家准頂会(十七日、貫首 於比叡山延暦寺)
- 二十日 菊まつり開關法要
お経を読む会(円乗院)
- 二十二日 世界連邦日本仏教徒協議会
新役員会発足披露の会(貫首 於京都)
- 二十四日 中国天台県訪問団団参(執事

三十一日 龍玉寺施餓鬼会(総務五大)

◇九月

- 一日 月次大般若(本堂)
讚衡蔵運営委員会
かんざん亭落語会
- 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 四日 金銅華鬘調査(六日)
- 五日 経蔵彩色調査
- 七日 天台宗陸奥教区第二部檀信徒会(二一隅大会(於毛越寺))
- 八日 山内願成就院三浦道子様逝去
- 十日 川崎大師様団参
- 十一日 金色堂調査
- 十四日 五郎沼薬師神社例大祭(総務五大 於紫波町同神社)
- 十五日 三陸郷土芸能奉演(宮古市 津軽石さん踊り保存会)
- 十六日 三陸郷土芸能奉演(大船渡市 赤澤芸能保存会)

- 二十六日 紅葉銀河(参道の紅葉を照らす)十一月十日)
- 二十七日 奉納演奏 縄文三味線 佐々木重吉(金色堂前)
- 二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 三十日 浄土宗光心寺様団参(貫首案内)
- 企画展示「山内の古仏展」後期(十一月二十六日、讚衡蔵)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
- 二日 郷土芸能奉演(胆沢 林ノ木澤 川鹿子踊)
- 念仏劍舞)
- お経を読む会(円教院)
- 奉納演奏 オオラジツボ 旧覆堂)
- 三 令和六年度町勢功労者表彰式(執事長 於役場)

第六十七回平泉町敬老会(執事長 於平泉中学校体育館)

- 十七日 白符忌(本堂)
- 十九日 赤堂稲荷例祭(護摩供)
- 二十一日 三陸郷土芸能奉演(大船渡市 永浜鹿踊保存会)
- 二十二日 秋彼岸会法要(常行三昧 本堂)
お経を読む会(金剛ノ普照)
- 三陸郷土芸能奉演 田老町 撰待七ツ物保存会)
- 二十三日 三陸郷土芸能奉演(宮古市 花輪鹿子踊り保存会)
- 二十四日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 二十七日 浄土宗知恩院布教師会様団参(執事長挨拶)
- 二十八日 奉納演奏(二関市民オーケストラ有志 本堂)
- 二十九日 富岡八幡宮様神饌田拔穂祭(総務亮王 於花立地内 神饌田)
- ◇十月
- 一日 月次大般若(本堂)

- 半能「秀衡」
語・仕舞(二葉きらり園、一関喜桜会 能舞台)
- 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛 劍舞/胆沢 行山流都鳥鹿踊)
- 八日 蓮華寺様団参(総務五大案内)
- 九日 金色堂イマージブツアー、高精細CGでたどる祈りの空間(光勝院)
- 秋期企画「経蔵法楽」声明の夕べ(経蔵)
- 奉納演奏(弦楽四重奏Mカルテット 旧覆堂)
- 十日 東久留米市大圓寺様団参
- 十四日 菊まつり表彰式(光勝院)
- 二十三日 天台会御速夜(本堂)
- 二十四日 天台会(御影供 本堂)
- 秋期一山会議
- 二十八日 金色堂孔雀調査
- 二十九日 JA「金色の風」収穫米奉納式(本堂)

中尊寺〈寺報〉『関山』第三十号

令和七年(二〇二五)二月十日

発行 中 尊 寺

(執事長 菅原光聰)

〒〇三九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。
ぜひご利用ください。(https://www.chusonji.or.jp/)。

本坊表門解体修理ならびに勧募について

平素より中尊寺の護持にご高配いただき誠にありがとうございます。

中尊寺本坊の表門は、寺伝により江戸時代、一関藩 旧伊達宗勝邸の門が移築されたものと伝えられ、伊達藩の庇護のもとで復興された中尊寺の歴史を今に伝える貴重な遺構であります。これまで屋根の葺き替えなどの記録はあるもののその重厚で風格のある姿は、参道の象徴として多くの人々を迎え入れてきました。

しかし、岩手・宮城内陸地震や東日本大震災の際に大きな被害を受け、柱の動揺や傾斜が進行しており、仮補強で維持してまいりました。今般、本格的な解体修理に踏み切り、クラウドファンディングへ挑戦する決意をいたしました次第です。

この修理を通じて、中尊寺と共に歩んできた表門を未来に引き継ぎ、檀信徒の皆様をはじめ、多くの方々温かいご支援が、この歴史的な門を再生し、九百年の歴史を次の世代に紡ぐ礎となることを願っております。

クラウドファンディングのご案内を同封させていただきます。

ご一読お願い申し上げます。



表門扉 乳金具（破損）



本坊表門 正面



〈発行 中尊寺〉